昭和44年12月23日第3種郵便物認可　昭和54年7月15日発行（毎月1回15日発行通巻第117号）

バドミントン 7

日本バドミントン協会　The Badminton World　No.117 1979



あなたは未来派？
頑固派？
現実派？

（カーボン）
（ウッド）
（スチール）

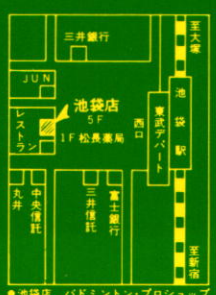


●年中無休
●営業時間
AM 9：00～PM 9：00

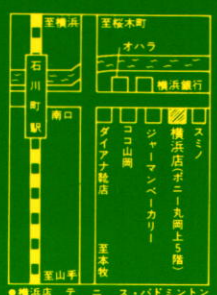
ラケットショップ元町



●渋谷店　バドミントン・プロショップ
☎ 03-400-7390



●池袋店　バドミントン・プロショップ
☎ 03-988-0215



●横浜店　テニス・バドミントン
☎045-651-2020

バドミントン 7

❷
第11回世界バドミントン選手権大会
インドネシア圧倒的な底力で7回目の優勝

❻
もう一度ルディを打ち負かす（プリ）
決勝でデンマークを倒す（ハルトノ）ほか

❽
トマス・カップ'79こぼれ話
風のいたずらほか

❿
トマス・カップ観戦ツアー
珍道中記

⓰
トマス・カップの歴史
台湾ＩＢＦの会員資格を保持

⓴
FLYING SHUTTLERS
跳んで●飛んで●翔んで●

㉒
キング・オブ・キングス
伝説的ヒーロー

㉘
歴史に残る名プレーヤー
動物的カンの持ち主

㉛
転機は到来した
ついに実力は出ずじまい

㉜
関東学生春季リーグ戦の熱戦から

㉝
関東学生春季リーグ戦
気力充実の法大が僅差で優勝

㊱
関西学生春季リーグ戦
大経大またも大魚逃がす

㊴
「バドミントン日本伝来の地」記念碑
除幕式おこなわれる

㊸
分析シリーズ・バドミントンの時間分析
ワールドカップ'79女子ダブルス決勝

㊻
児童・生徒活動現場からの提言
有望プレーヤーの発掘・育成に発想の転換を

㊽
読者と編集者
編集室から

◇表紙デザイン・構成、本文カット＝野間デザイン室
◇写真撮影＝赤星三樹（ニコンFM NIKKOR 20/3.5, 135/2.8, 200/2）
◇今月の表紙＝第11回トマス杯大会閉会式のもよう

THOMAS CUP '79



インドネシア 圧倒的な底力で7回目の優勝

第11回世界バドミントン選手権大会

1979・5・24―6・2

ジャカルタ・スナヤン・スポーツセンター

第11回を迎えたトマス杯大会は、5月24日から6月2日まで、インドネシア・ジャカルタのスナヤン・スポーツセンターで開かれた。

大会前の予想どおり、インドネシアが圧倒的な力をみせつけ、準決勝の日本、決勝のデンマークと、たてつづけに9―0のスコアで倒し、優勝をとげた。

インドネシアの優勝は第8回大会から4回連続の7回目の偉業である。

第11回世界バドミントン選手権トマス杯大会インターゾーン

▽1回戦（5・24～25）

日本 8（S 4―1, D 4―0）1 カナダ

第1日

銭谷 2（15―6, 15―10）0 トライオン

土田 2（15―11, 15―7）0 チック

尾崎 2（15―8, 15―8）0 マクドゴール

辻 I・ジョンソン、

飯野 P・ジョンソン、

土田 2（15―9, 15―4）0 デベレ

第2日

長谷川 2（15―10, 15―1, 15―11）1 P・ジョンソン

土田 0（12―15, 9―15）2 トライオン

銭谷 2（18―15, 4―15, 18―16）1 チック

飯野 2（15―1, 15―3）0 ジョンソン、マクドゴール

尾崎 2（15―14, 15―4）0 ジョンソン、デベレ

辻

▽準決勝（5・26～27）

デンマーク 7（S 4―1, D 3―1）2 インドネシア

第1日

プリ 2（15―6, 15―11）0 モディ

ハンセン 0（15―18, 10―15）2 プラカシュ

ハンセン フラッド 2（15―5, 17―14）0 ガングリ、ガンデベリ

デルフス スコブガード 2（15―6, 12―15, 17―14）1 プラカシュ、パワー

第2日

デルフス 2（15―5, 10―15, 15―10）1 ガングリ

プリ 2（15―5, 17―14）0 プラカシュ

ハンセン 2（15—7 15—6）0 モディ
デルフス スコブガード 1（10—15 15—8 12—15）2 ガングリ ガンデー
ハンセン フラッド 2（15—3 15—11）0 プラカシ ユ、パワベリ

▽準決勝（5・28〜29）
インドネシア 9（S 5—0 D 4—0）0 日本

第1日
リム・スイ・キン 2（15—1 17—16）0 銭谷
ルイス 2（18—13 15—3）0 土田
チュンチュン、ワジュディ 2（15—4 15—6）0 梅野 池田
クリスチヤン、リム・スイ・キン 2（15—5 15—2）0 土田 飯野

第2日
ハルトノ 2（15—1 15—8）0 辻
リム・スイ・キン 2（15—4 15—2 11—15）1 土田
ルイス 2（15—4 15—7 11—15）1 銭谷

▽決勝（6・1〜2）
インドネシア 9（S 5—0 D 4—0）0 デンマーク

第1日
スミラット 2（15—10 15—7 11—15）1 プリ
リム・スイ・キン 2（15—6 15—3）0 ハンセン
チュンチュン、ワジュディ 2（15—3 15—2）0 スコブガード デルフス
クリスチヤン、リム・スイ 2（15—1 15—8）0 フラッド ベリ ハンセン

第2日
ハルトノ 2（15—2 15—10）0 デルフス
リム・スイ・キン 2（15—1 15—8）0 プリ
スミラット 2（15—9 15—9 12—15）1 ハンセン

チュンチュン、ワジュディ 2（15—6 15—8）0 土田 飯野
クリスチヤン、リム・スイ・キン 2（15—5 15—4）0 梅野 尾池田
チュンチュン、スミラット 2（15—5 15—9）0 フラッド ベリ ハンセン
クリスチヤン、リム・スイ・キン 2（15—4 17—16）0 スコブガード デルフス



風もシャトルもすべて味方せず

インドネシアがコートに姿を現わす5月28日、スナヤン・スポーツセンターの周囲は多くの観客、自動車、自転車、そして数知れぬダフ屋、屋台でうまった。整理の陸軍兵士、警官もとても足りず、厳重な入場ゲートは二重になり、その狭い入口で先を争う人々が大声をあげて押し合っていた。

インドネシアの優勝は、アジア大会で中国を破ったことからも、また3月の全英選手権のようすからも、ほぼ確実であった。

この堅城をおびやかさぬまでも、せめてだれかが一矢を報いることができるかどうかが、興味の焦点となっていた。

日本の板垣監督は「ダブルスでうまくいけば2ポイント、シングルスでも1ポイントをあげることができるかもしれない」と語っていた。これは全英選手権で飯野・土田組がチュンチュン、ワジュディ組を相手に、マッチポイントを握ったことをふまえての発言であった。シングルスのポイントは、全英選手権でベスト8にはいりはしたものの、準々決勝でプリ（デンマーク）にあっさりと敗れたルイス・ポンゴには勝てるだろうと予想したものである。

しかし、これらの楽観的予想は、ことごとく破れ去っていっ



デンマークは暑さに完敗

たのである。

トップシングルスの銭谷は、リム・スイ・キンを相手に一歩もひかず、第1ゲームは14―9とゲームポイントを握ったが、十数回に及ぶサービスも得点に結びつけることができなかった。

かなり強い風が吹き抜けるコート上で、しかもラリーのとぎれるたびに交換しなければならないほど悪質なシャトルコック（英国製）でありながら、その一本を落とさなかったリム・スイ・キンの実力、底力は空恐しいものであった。

第2シングルスのルイス・ポンゴは一九六〇年の十二月三日生まれだから、弱冠18歳である。現在高校生で、バドミントンの戦績は、ASEAN学生大会で2位になったことと、今年の全英選手権ベスト8に進出したことくらいである。

身長も一六五センチほどと小柄でとくにエースを持っているわけではないが、抜群のスタミナと、そして結果を恐れぬ若さを武器に、コートを走り回った。

ダブルスはシングルスにもまして実力差がはっきりしており、まるで試合にならなかった。

飯野・土田にはまったく元気がなく、とても勝つなどとは及びもつかなかった。

第2日目は、ルディ・ハルトノが登場するとあって、前日にもまして場内は盛り上っていた。大会前3ヵ月、走り込みと打ち込みを課し、この1月下旬来日したときにくらべ、ひと回り体がしまり、せいかんさも増していた。

しかし、やはり試合から遠ざかっていたせいか、カンが悪く、レシーブも不安定であった。そして自分の汗に足をすべらせて転倒するといった、かつてのハルトノからは想像もできないシーンも見られた。

辻はハルトノを上回る攻撃力をみせ、一時リードを奪ったりしたが、スタミナ切れか後半は一方的に押しまくられてしまった。

続く土田、銭谷はともに第1ゲームを取りながら、あとは同じような展開で完敗した。銭谷だけはルイスを相手に一勝するのではないかと期待されたが、それも不発に終わった。

インドネシアは、第1ゲームは風上のコートを選び、攻めのプレーに徹し、風下のコートに回ると徹底的にコーナーをつくつなぎのプレーというパターンをとっていた。

日本もかなり風を計算に入れてプレーをしたが、シャトルの不安定さにも悩まされ、ついにはスタミナ切れの敗戦という形がくり返された。ダブルスについては、日本のスマッシュよりも速いレシーブが返ってくるなど、残念ながら手も足も出なかった。

心配された観衆のマナーは、大差だったこともあり、プレーにさして支障はきたさなかった。しかし、ダブルスの池田のサー



"神様"伝説を裏づける

ブの際に、大声でヤジるシーンがあり、これはベンチから毅然とした態度で抗議してよかったのではないだろうか。

決勝のデンマークは、少なくとも日本よりは好成績を残すのではないかと思われたが、試合を終えてみるとほぼ同じ内容であった。

大会直前の合宿から抜け出し、首脳陣からひんしゅくをかったスミラットは、名誉ばん回をかけプリを破ったのは立派である。

プリもこの年（32歳）になって、トップシングルスに出るとは、自分でも意外であっただろうが、そのハードヒッターぶりをいかんなく発揮した。第1ゲームを取り、第2ゲームはかんたんに捨て、ファイナルに賭けるというプリらしいかけひきだった。

しかしスミラットのスタミナ、スマッシュ力は衰えず、プリの追い上げも限界に達し、貴重なトップの勝利をスミラットがもぎとった。

そのあとは、もうすっかり歯止めがきかなくなり、第1日目で早くも王手となった。

またも勝利を決めるポイントに登場したハルトノは、対日本戦でだいぶカンも戻り、一方のデルフスは気の毒なほどの不調ぶりであった。

パーフェクトといわれるデルフスのバックハンドも効果なく、ハルトノは床スレスレのレシーブからネットインを繰返すなど、〝神様〟ぶりが時折り顔をのぞかせるようになり、集中力を欠いたデルフスを突き放した。

これでハルトノは無キズのまま引退することになろう。

残る興味は、デンマークが完封を逃れるかどうかにかかった。

しかし、プリは足を痛め、チェンジエンドの際に、トレーナーの治療を受けるといった状態で、ハンセンは主審のスコアリング・ミスに乗じて第1ゲームを取ったが、あとは奮起したスミラットに押しまくられた。

スミラットは最終ダブルスで、不調のワジュディに代わって出場するなど、この決勝戦でも大車輪の活躍だった。

デンマークは、コーチのバッカーやOBのコベロらも言っていたように、インドネシアに勝つことは最初から断念していた。しかし、このような完敗は無念であっただろう。

暑さに弱いデルフスの目をおおいたい不調ぶり。ダブルスでサービスの半分以上をミスし、中間ボールを空振りやフレームショットするなど、まったく別人のようであった。

ハンセンも力不足であり、かろうじてプリのがんばりで形をつくろった感じである。

インドネシアはそろそろ新旧交代の時期を迎え、ハルトノ、ワジュディは、この大会が最後かもしれない。しかし、そのあとにカルトノ、ハリヤント、ダニーといった若手が台頭してきている。

日本はこの完敗を薬にして、若手の養成に全力で取り組むべきである。高校生といわず、中学生時代からの一本化した指導体制を確立し、三年後をめざしたいものである。



まだまだ続くかインドネシアの天下

インドネシアで発行されている英字新聞では、最も歴史のある〝インドネシアン・オブザーバー〟紙は、トマス杯の期間中多くのページをさいて、トマス杯関係の記事を掲載していた。

そのなかからいくつかのものを要訳してみよう。

「もう一度ルディを打ち負かす」
プリは語る

一九七三年のトマス・カップ・トーナメントも、今回と同じくジャカルタで開かれ、決勝に進出したデンマーク勢はインドネシアに1―8と敗退した。しかし、プリ自身は、最高のライバル、ルディ・ハルトノを破って、デンマーク唯一の勝点を挙げていたため、いささか得意気だった。

今回のインドとの対戦二日目に、第一人者プラカシュを破ったすぐ後、プリは語った。

「これで、ルディ・ハルトノと対戦することになるだろう。そして、このジャカルタでの一九七三年大会同様、今度もルディを負かすだろう」

そして、汗びっしょりで〝エキセントリック〟気味のプリはこうも言った。

「ルディは決勝で僕と対戦するのをこわがっているさ」

この挑戦にルディ・ハルトノは笑ってこう言っただけだ。

「今のところ僕の頭の中にあるのは、準決勝での日本との対戦だけだ。でも、もし決勝でスウエン・プリと対戦するとなれば、うれしいことだね。誰でも復讐はしたいもの、そうじゃないかい？」

（5月29日号）

「がっかりしてはいないよ」

インドネシアのイイー・スミラットは、一九七九年トマス・カップ・チームに含まれないとのインドネシア・バドミントン協会の決定後、ふさぎこんでいると報じられていたが、彼はこれを打ち消した。

「新聞にはいろいろ書かれたが、僕はふさいでなんかいないよ。対日本戦のチームに指名されなかったけれでも、練習はやっている。決勝で僕が必要にならんとも限らないだろう」

先週の土曜日、トレーニング・センターで、コーチ陣の指示どおり、熱心にトレーニングに励んでいた。

前日左利きのダニー・サルテイカを相手の練習試合では、元気で15―3、15―3のストレート勝ち、前日の金曜日にも、トマス・カップ選手のルイス・ポンゴに15―9、15―9のストレート勝ちだった。トマス・カップ・チーム選抜試合の時には、イイーはこの若いポンゴに敗れている。ポンゴはこの大会出場は初めてになる。

（5月29日号）

「インドネシアの勝利はかたい」
コベロの予想

世界的なバドミントンの名選手だった二人がジャカルタに滞在中。デンマークのフィン・コベロとエルランド・コプスである。

今回はトマス・カップ決勝を中継のためデンマークのテレビ解説者として訪れたものである。

スナヤン・スポーツ・センターで話す機会を得た記者に決勝ではどこが勝つだろうかときかれて、コベロはこう答えた。

「僕はインドネシア・チームだと思う。インドネシア選手は、技術的にもほとんど同じぐらいのが揃っているし、経験にしても同じだ。まったく、強すぎるくらいだ」

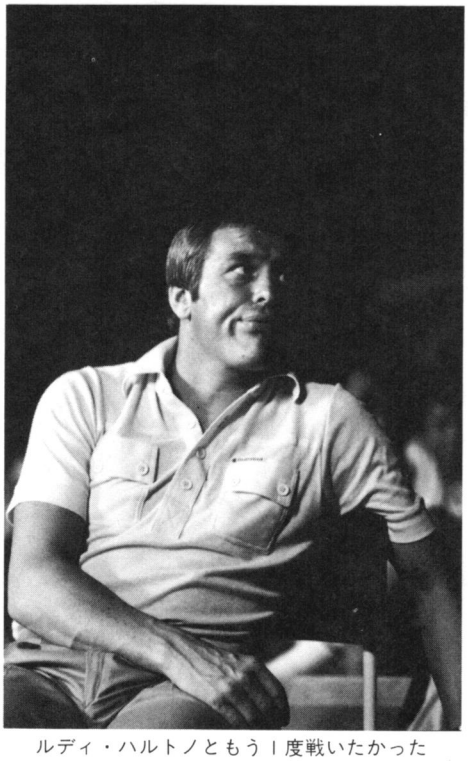
重ねて、予想するスコアをきかれて、これもすぐに、

「インドネシアが8―1で勝利」と返事が戻った。一般の予想が、6―3あるいは5―4でインドネシア勝利、なかには、5―4でデンマークの勝利もある状況で、この予想には驚かされた。

そして、追い打ちをかけるように静かにコベロはこう言った。

「しかしね、9―0でインドネシアの勝ちということもありうるよ」

（5月29日号）



ルディ・ハルトノともう1度戦いたかったプリだが、惜しくも実現しなかった

「決勝でデンマークを倒す」ルディは楽観的

準決勝で9―0と圧倒的な勝利をおさめた後、インドネシア最古参、元全英選手権保持者のルディ・ハルトノは、インドネシアは七回目のタイトルを守るだろうと、楽観的な意見を述べた。しかし、スコアについて予想はしなかった。

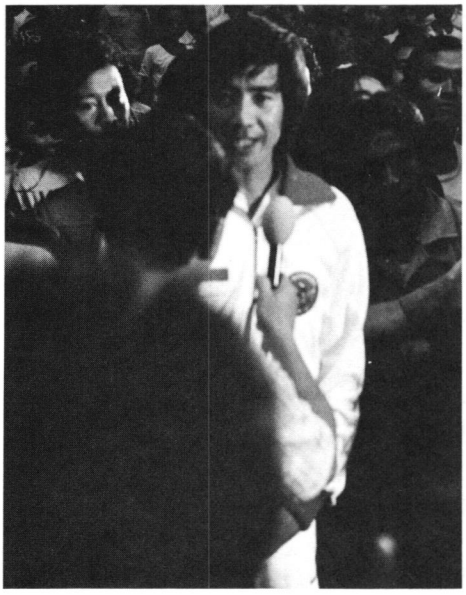
「大事な目標はトロフィーを渡さないことだから、勝つことが第一だ」

プリとの対戦について、「スヴェン・プリに一九七三年のお返しをするよりも大事なことは、カップ奪取に熱意を傾けているチームとしてのデンマーク勢を負かすことだ」

専門家筋のこの二人の対戦予想は五分五分とのこと。

日本との準決勝二日目、この全英選手権シングルス八回獲得のルディは、辻にストレート勝ちをしている。二年間のブランクの後カムバックして、シングルスに勝点を挙げ、インドネシア5―0のリードとなった。そして、その後の四試合にも勝ってインドネシアは見事に日本チームを一掃したのだった。

（5月31日号）



インタビューに答えるハルトノの表情は明るい

「優勝は集中トレーニングのたまもの」コーチは語る

決勝でデンマークを9―0の完璧なスコアで降したインドネシア・チームの勝利は、ナショナル・トレーニング・センターでの、全員の集中トレーニングのおかげだ、と、コーチのタヒール・ジデは語った。

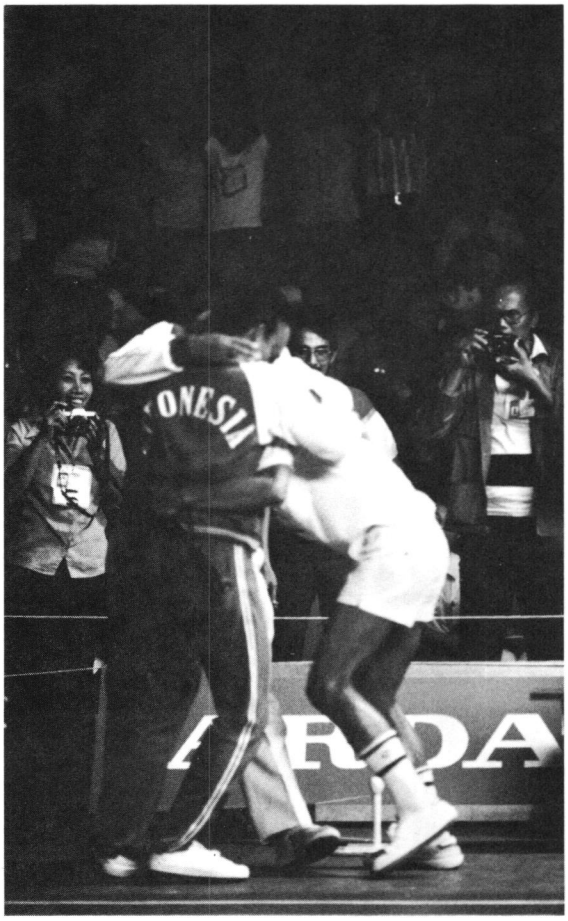
「全選手最高の出来で、国中のファンに満足してもらったけれども、コーチとしては、この先に控えた国際トーナメントを考えれば、満足してばかりもいられない」

ダブルスで急にチュンチュンと組むことになったイイー・スミラットについては、いつもチュンチュンと組んでいるヨハン・ワジュディが風邪をひいていたからだと述べている。スミラット・チュンチュンのペアは、これまでに何度か国際試合を経験している。それに、練習期間中、全選手がシングルス、ダブルスのいずれも手がけているので、このような緊急の時にも大して困らないのだと語っていた。

次のトマス・カップの見通しについて、たとえヨーロッパで開催されたとしても、インドネシアには依然カップを保持する見込みは大いにある、とジデは言っている。

「次のトマス・カップでも、平均年齢は三十歳以下だから。しかし、トレーニングはもっと集中的に、組織的に行なう必要があるし、そのためには、適切な設備や、資金の増額が必要となる」と語った。（6月3日号）

（訳―友枝康子）



決勝でプリを降したスミラットを
抱きかかえるジデコーチ（後ろ向き）

トマス・カップ'79 こぼれ話

〝インドネシアン・オブザーバー〟紙は、トマス杯期間中〝トマス杯こぼれ話〟として、いろいろなエピソードをのせていたが、そのうちのいくつかをご紹介しよう。

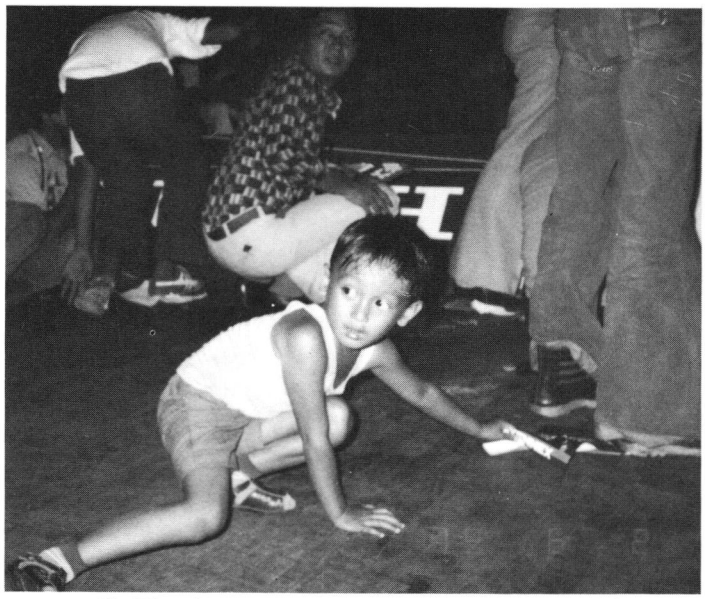
◆マスコットのご利益

出場チームのうちで、デンマークだけがマスコット持参だった。メンバーの一人が、クマの人形を応援団の中から高くさし上げて、何かわからないことをわめく。そのあとでコートのライン上に置く。ところが、土曜の夕方は、アンパイアの椅子の下に置いた。

「デンマークも今夜は負けるよ。マスコットが変な所に置いてあるもの」観客はきびしい。

しかし、マスコットのご利益はたしかで、7―2でインドに勝った。はたして決勝でも幸運をもたらしてくれるかどうか？

（5月29月号）



パンフレットほしさにコートサイドまではいってきた少年

♣静かに!!

拍手で応援をしたり、ほめそやすことが、あらゆるスポーツでインドネシアの観衆の習慣になった。ところが、拍手といっしょに「不適切な」言葉まで飛ぶことがある。

デンマーク・チーム側の応援と違うのはこういうところで、彼らは、拍手すべき所で拍手をしている。シャトルコックが生きている間は拍手は控える。

「見習わなくては」と、第一回のインドネシア・トマス・カップ・チームの中心となって、マラヤからカップを奪取した、タン・ヨー・ホックは言っている。

「拍手のタイミングを心得ているから、選手の気を散らせることもない」

（5月29日号）

♥五分間待って!

「あと五分待って下さい」

報道陣がドアのノブに手も触れぬうちに、警備員が言う。

控室にいる選手とインタビューしようとする記者にとって、五分間待つというのは慣例になってしまった。

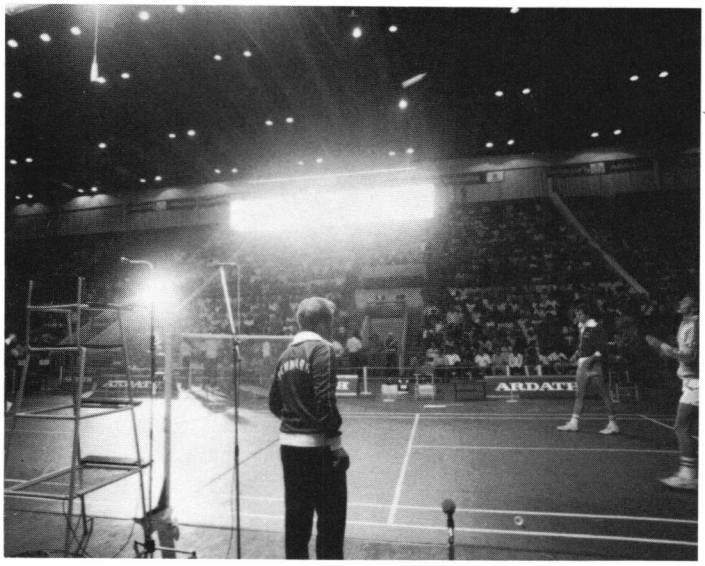
でも、おかしいではありませんか、外国の選手に会うよりもインドネシア選手に会うのがむずかしいというのは。記者の一人が警備員に抗議をしていた。

（5月30日号）

♠帰国を延期

開会早々日本に敗退したカナダの選手たちが、観客にまじって観戦していた。どの試合も非常に熱心に観ている。

カナダ・チームは、リム・スイ・キン、ルディ・ハルトノ、



風の状態を入念に調べるトム・バッカー（デンマーク・コーチ）
彼は試合中もタバコの煙で風向きをみたりしていた

スヴェン・プリ、フレミング・デルフスらの世界的名選手のプレーを観て、この機会にもっと経験を深めたいというので、わざわざ帰国を延期したということだった。（5月31日号）

◆決戦前夜

インドネシアとデンマークの「決戦」の前夜、インドネシア選手は集中トレーニングに励んでいた。ルイス・ポンゴは〝スキッピング〟を、ダニーはウェイト・リフティングをやっている。

デンマーク・チームも、くつろいだ雰囲気のなかで、滞在中のホテルの敷地内にある、ミニ・ゴルフ・コースで肩ならしをしていた。（6月1日号）

♣紅一点

日本の月刊誌「バドミントン界」は四人のジャーナリストを派遣し、今行われているトマス・カップの取材にあたっている。日本＝インドネシア間の準決勝一日目に到着。中に紅一点、女性記者の若園三輪子嬢がいる。（6月1日号）

♥風のいたずら

組織委員会では、会場に吹きこむ風をできるだけ少なくしようと、あらゆる措置を講じた。まず、掲示を出して、試合の進行中は、観客の会場への出入りを禁じた。この掲示は会場の入口全部にはり出された。

また、スナヤンの内部のスタジアムの南側のメイン・ゲートには大きな木製のついたてが置かれた。その方向からの強い風をやわらげようというのである。（6月2日号）

◆史上初の快挙

インドネシアは、史上初めての四回連続トマス・カップ優勝をなしとげた。

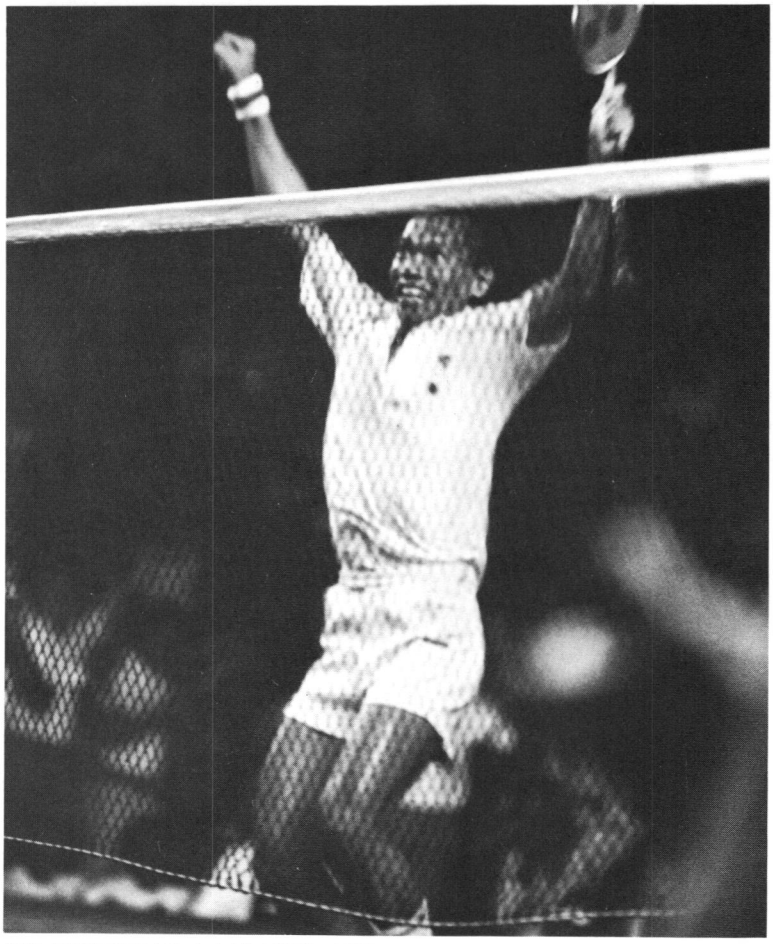
一九六七年の「事件」がなければ連続七回ということになったはずだ。興奮のあまり収拾のつかなくなったインドネシア応援の観客によってひきおこされた（と当時のレフェリーによって判断されたのだが）事件によって、試合は中断され、後にＩＢＦは中立的な国での再開を決めた。インドネシアはこれを拒否したので、優勝は自動的にマレーシアのものとなった。そして、三年後のクアラルンプルで、インドネシアは8―1とマレーシアを破った。（6月4日号）

♣スミラットの〝答え〟

インドネシア対デンマーク決勝戦の第一日目、シングルスでスヴェン・プリに劇的な勝利をおさめたイイー・スミラットは、珍らしく歓声をあげ、コートで両こぶしを高くあげて飛び上がった。そしてその後、言葉もなくコーチのタヒールの肩に顔を埋めていた。観衆やカメラマンに取り囲まれて控室に入る彼の顔には涙がみられた。

そして、この勝利によって、ルイス・ポンゴに代って決勝に出場しただけのことはあったことが証明されたわけである。彼の出場に反対する批判や抗議に対して、「明確な答え」を出したことにもなる。

デンマーク・チームは、頼みとするスヴェン・プリ、モルテン・フロスト・ハンセンの両選手とも、「インドネシアの弱味」と見ていたイイー・スミラットに痛い目に合わされたわけだ。（6月4日号）



協会内部の不評を吹きとばす勝利の瞬間、スミラットは何度も飛び上がって喜んだ

日本男子チームが久しぶりにトマス杯大会インターゾーンに出場するのを機会に、この目で世界のプレーを見ようと仲間が集まり、ツアーを組みました。

最終的には12名のパーティーとなりましたが、メンバーは次のとおり（敬称略）。

渡辺武司（日本コンテナターミナル㈱）笠原勇（茨城大学工業短期大学講師）関根義雄（日本体育大学講師）平井克英（相沢マチ子エンタープライズ）瀬戸孝（産業能率大学出版部）沼沢隆（日本体育大学4年）浅沼正義（同4年）坂井茂則（同2年）疋田清（ラケットショップ元町）喜多隆一（同）赤星三樹（バドミントン界編集長）若園三輪子（同編集部）以上。

出発前からトラブルが相つぎ、前日になっても落ち着かず、幹事役となった編集長は東奔西走の毎日でした。

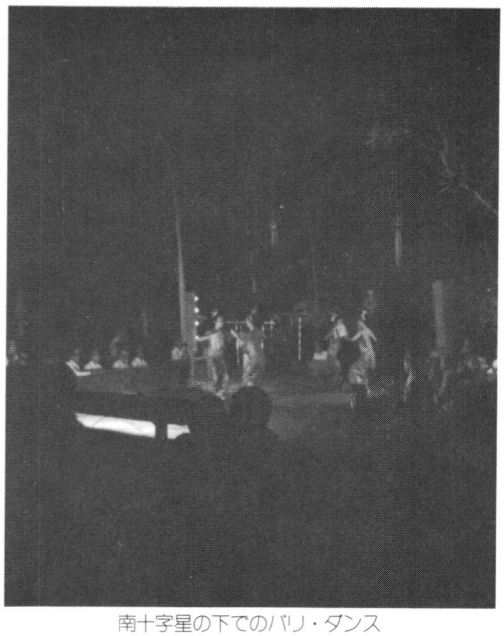
パーティーのメンバーが、交代で日記をつづったので、ここで紹介します。常識的には考えられないことも多く発生しましたが、すべて事実。しかし本人の名誉のためにやや控え目に書いてあるところもあります。また、これも本人の名誉のためイニシァルだけにとどめました。



▼5月25日㈮ 出発まであと2日、いろいろ紆余曲折はあったが、航空券を手にする日となった。この間の事情を知るものとしては、万感胸に迫るといったところ。SAが手にした航空券をしげしげと眺めながら、MWとTS、KaHはその労をねぎらいに炉ばた焼きへ行った。四人の共通のことば〝これでどうやら行けそうな気がしてきた〟。四人の共通の本心〝まだまだ何が起こるかわからない、安心するのは早い〟。

▼5月26日㈯ 翌日の出発が早いのと、京成スカイライナーがストライキのため、それぞれ足の便のよいところに分宿。予算の都合もあってホテルのシングルルームに男2人で内緒に泊った者も……。

▼5月27日㈰ 快晴に恵まれて午前7時に箱崎シティターミナルに集合。旅慣れているKaHは「いくらなんでも早すぎるよ、まったく初心者は疲れる」とチクリ。しかしSAは、あくまでも慎重。あとになってこの時間的余裕が大いに救いとなるアクシデントも起きたわけだから、SAの読みは的中。ダービーも


南十字星の下でのバリ・ダンス

的中するか！

ガルーダのカウンターでチェックインをすませ、各人に航空券を渡したSA、「これでホッとした、さあ行こう」と大声。それぞれ手荷物を手にして歩き出そうとすると、TNが「あのー、ボクの切符は？」。これを聞いたMAは「さっきキャリングの上においてあったやないか、どうしたんや」と強気。（この強気も数時間後に消えることになろうとは、MA夢にも思っていなかった。）

さあ、それからすでに運び込んだキャリングを追いかけて航空会社の人と中に入る者。もう一度自分の手荷物を点検するなど大騒ぎ。結局一時間に及ぶ捜査も空しく、発見できなかった。

「カウンターから一歩も動かないのに、どうしてなくなるのかな～」と全員で考え込むひと幕も。

幸いチェックインがすんでいたので、今日泊まるバリのデンパサールまでは行けることになり、まずは一休み。

出鼻をくじかれながらも、みんな気をとりなおして、リムジンバスに向かう。その時MWが「あれっSAさんあんなにいいバッグ持ってましたっけ？」。

「あれあれ！おいSAそれ誰のバッグだ！」とKaH。言いおわらないうちに、真っ青な顔をした人がバタバタとかけより、SAの手からひったくるように自分のバッグを奪い返した。すぐに気づいたからよかったが、一歩まちがえば、出発どころか留置場に一泊となるところだった。

それでも10時すぎになって、ようやく成田に到着。11時のガルーダになんとか間に合った。ついさっきまで落ち着いていたKaHも「そろそろ搭乗受付に行こう」というが、何しろ一瞬たりとも12人が揃うことがない。なにか食べに行く人。お菓子を買う人。ヒゲソリを買う人、ダービーの券を電話で頼む人…。あーあどんな旅になるやら。

ガルーダは定員約200名。ところが乗客はたった18名。うち12名がわれわれのパーティー。なかば貸切り同然で、機内に入るやいなや、こっちの席がいいか、あっちがいいかで大騒ぎ。

「富士山どっちかしら」と言ってウロウロするのはMW。まだ未練気に〝競馬エイト〟を広げているのはSA。

無事に飛び上がり、ベルトをはずすやいなや得意のインドネシア語を駆使して〝友好〟を深めたのはもちろんKaH。カードを広げて遊び始めたのはIK。

いずれにしても、貸切りのため全員リラックス。最初は海が見えたの、島があるの騒いでいたが、途中で疲れて居眠りに落ち込んだのがTS。

デンパサール（バリ島）に着くと、ヤシの木など熱帯特有のムードがいっぱい。デンパサール〝国際空港〟というには、あまりにも質素な施設に一同不安。

税関は、「バドミントンのトマスカップを見に来た」のひとことで、なかばフリーパス。もっぱら話題は、このラケットはどこのか、このバッグはいくらか、といった内容。日体大の諸君がラケット等ひと揃い持参のため。

税関を出て、クレームタッグと照合して荷物を受け取ったMAは、キャリングに入れたお金がない!!。底の底まで探したがとうとうナシ。ノシ袋の中も抜き取られガックリ。

「あとで、みんなでカンパしてあげるから」とMWに言われてウンウン、とうなずく。

「インドネシア政府観光局の資料によれば、バリは世界一治安のいい所となっていたのに……」と、TSが長嘆息。

サヌールビーチホテルまでは、ホテルとタイアップしている旅行会社のマイクロバスで。途中泥水の中で行水や洗濯をしたりしている姿をみて、KiHは「ここが夢の島・最後の楽園か」とつぶやく。

初日にして紛失と盗難にあい、全員やや割り切れぬ気持ちで、南十字星を見てオヤスミナサイ。

▼5月28日(月) 午前中はホテル前のサヌールビーチで肌を焼いたり、いまにもこわれそうな小屋の並ぶスーベニアショップで買い物。なにしろ必ず、むこうと照合して荷物を受け取ったMAは、キャリングに入れたお金がない!!。底の底まで探したがとうとうナシ。ノシ袋の中も抜き取られガックリ。



ジャカルタでの宿舎、
サヒド・ジャヤホテル

は高く値をつけてくるから、値切るだけで疲れる感じ。紅一点のMWは、バリ更紗をたくさん買って満足。SAは店のお嬢さん?に大モテで、あちこちの店に引きずりこまれ、ホテルに帰ってくるや、「もうお土産を買いすぎた」。

前日の夜から腹の具合の悪いRKに、TSが「これはよく効くんだ」と言って抗生物質を与える。水なしで飲み込んだRK「これでもう安心」。

若手のトリオ、TN・MA・SSはプールサイドで日光浴。そのうちショートパンツのままザブン。最初は、われわれパーティーを一応お客として扱ってくれたボーイやメイドたちも、その実態を知って、もうお友達としての会話・態度になってしまった。お互いにカタコトの英語で〝国際親善〟をはたす光景があちこちで見られた。

3時30分の飛行機でデンパサールからジャカルタへ向かった。小型のDC9は途中雲に突っ込んだり、あおられたりしながらも5時少し前に無事ハリム国際空港に到着。マイクロバスで宿舎のサヒド・ジャヤにはいるや、ただちに着換えて、スナヤン・スポーツセンターへ。

いよいよこの目でトマス杯が見られるのだ。スナヤンに近づくともう道いっぱいにダフ屋があふれている。入口のゲートは二重で、警官と陸軍兵士がしっかりと固めている。8人は一般の入場券で入ったが、取材にきたSA、TS、MW、KaHは、KaHを先頭にプレス席に陣取った。事前に日本バドミントン協会を通して取材を依頼してあったのでスンナリOK。SAとTSはカメラマン。MWはレポーター。KaHは通訳ということに役割を分担。

午後7時、日本がインドネシアに挑戦する準決勝が始まった。トップシングルスの銭谷君。非常にいい面魂だ。スタンドにまで彼の気迫が伝わってくる。リム・スイ・キンを相手に一歩もゆずらない。1万5千と発表された大観衆のプレッシャーにも負けず、MWは「またホレ直してしまったわ」。

銭谷のがんばりもキムの力べにハネ返されたあとは、もうアレヨアレヨという間に完敗、

感想をひとことずつ。

▽キムの態度が鼻についてきた▽銭谷の気迫はすばらしい▽飯野と玉田の二人は元気がなかったな▽ルイスってまだ18才!▽チュンチュンのジャンプスマッシュはスーパーマンだ▽インドネシアはお客さんを暖かく迎えることを知らない▽12時くらいまでかかると思ったのに、まだ9時半だ

それぞれ初めて見たトマス杯の感激を胸に、タクシーに乗ろうとするとIKが見当らない。もうすぐ来るだろうと待ったがいっこうに現われず、KiH、RKが捜しに行く。約30分待ったが現われず、やむなくホテルに帰る。ホテルのロビーで、みんな不安気に待つ。なにしろ数時間前にジャカルタについたばかり、ホテルの名前だってろくに覚えていないはず。このツアーに誘った形のKaHは、とくに心配そう。

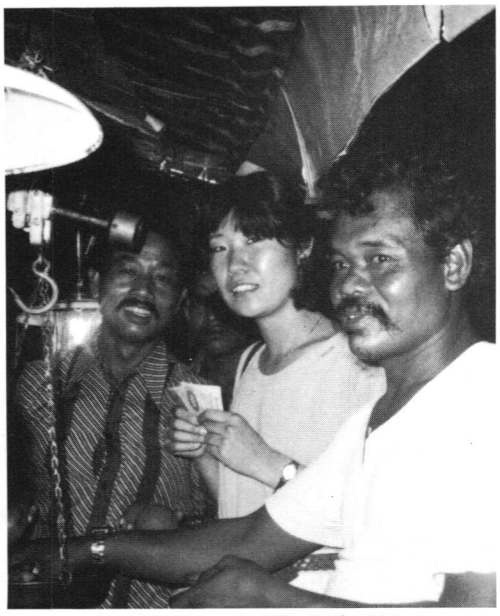
そこへ突然、「やーやーお待たせ、お待たせ」とどなりながら当の本人涼しい顔で登場。みんながあっけにとられているうちに、玄関の泥落しをとびこえ、ロビーのぶ厚いじゅうたんで泥んこの靴をゴシゴシ。ライトグリーンのじゅうたんがみるみるまっ茶色。わきに座っていた泊り客は、驚きで椅子から落ちそう。これを見ていたMW、おかしさをこらえながら、長居は無用とばかり、「さあ、部屋に帰りましょう」とうながす。

やっと、2日目も無事終了。

▼5月29日(火) 午前中はプールで肌を焼く。目をつぶっていても太陽が見えるほど強い日ざし。SAはインドネシア語のカセットを聞きながらおなかを焼く。TWは、すばらしい肉体美を焼く。KiHは小骨のささりそうな骨体美を焼く。さらに、みんなのマスコット的存在MWは、ブルーのストライプの超ビキニで、浅野ゆう子ばり(ちょっといいすぎ?)のプロポーションを焼く。そしてTN・MA・S


うす暗い体育館は超満員


ジャパニーズ・ヤクザ!?


どこへ行っても女性は買い物がお好き

Sのトリオは横目でそのビキニを見ながら焼く。TSは自分の汗におぼれながら焼く。

そして午後からは、パサールバルーへ出かける人、昼寝をむさぼる人などさまざま。パサールバルーは言ってみればジャカルタ銀座。KiHとRKは仕事がらスポーツショップを熱心にのぞいて回っていたが、日本では1万円前後するイタリー製のウェアがなんと約2千円。買おうかと現物をよくみると真っ赤なニセモノ。それもマークがさかさについているような粗悪品。

「買わなくてよかった」

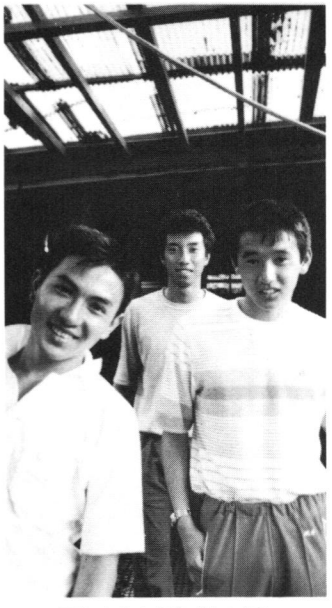
編集長に果物とタバコを買っていこうと品定めをしていたTSとMWは、通りの一番はじの市場へ行った。売り子たちがすぐにかけ寄ってきて、「日本から来たのか、弱いな日本は、4―0じゃないか」「リム・スイ・キンはナンバーワンだ」「お前たちはバドミントンできるのか」と矢つぎ早に質問攻め。もちろんカタコトの英語同士だから、面倒になり、TSはインドネシアはナンバーワン、しかしナンバー2は日本だ、とワンパターンの返事ばっかり。結局ハドミントンのおかげでだいぶ安く果物を買うことができた。

なにしろ、ここでも買い物は値切るのが一緒のセレモニーみたいなものだから、時間がかかることはなはだしい。

強い日ざしにまいった4人は、ホテルに帰ることにしたが、ただのタクシーに乗っても面白くないので、ベチャという簡易タクシーに乗ることにした。TSが「値段は交渉してやるからまかせとけ」と言って手を上げる。「チルピアで行くってさ」ということでまずKiHとRKが乗る。バタバタッと大きな音をたてて小さなミゼットみたいなのが走り去る。それから、乗車拒否にあったりして、またまた面倒になったTSは、MWに「タクシーで帰ろう」と、手を上げて交渉開始。まずまずの線で妥協し、ホテルへ帰った。

ところが待てど暮らせど、さきに着いているはずのKiH・RKが帰ってこない。自分がすすめた手前、TSは気にする。30分くらい後に、2人は汗びっしょりでヨタヨタ歩いてロビーにはいると、大声で「ひどいのに乗せられた！」と叫んでバッタリ。よく聞くと、ベチャは大きな道路を走ってはいけないので、裏通りをぐるぐる回り、そのあげく、ホテルのずっと遠くで降ろされてしまった。そのうえチルピア払うと、「ノー、一人で千チルピア、二人だから2千」と請求され、腕力に余り自信のない二人も、ムッとして千だけ払って歩き出したそうである。ところが、回りにいつの間にか雲助ふうのお兄さんたちが集ってきて、じっとにらみつけている。青くなったKiHは、あわててもう一枚払って、ホテルめがけて一目散、という次第。TSはひとこと「悪かったな」。

日本対インドネシアの二日目も、インドネシアの強さをみせつけられただけで結局、0―9の完敗。残念、無念。


日体大のさわやかトリオ

▼5月30日(水) 今日は試合がない日なので、みんなフリー行動。いちばん元気なのが、最年長のTW。まず朝はランニング、午前中プール、午後はショッピング。いちばん怠情なのがSAとTS。朝は朝寝。昼は昼寝。そして夜寝るまで、ときどき起きて居眠りをする、といった感じの生活。二人で口をそろえて、「あーあ金がないなあ、ジャカルタもあきたな」。

カジノにこったKiHは、部下のRKを連れて、またまたくり出す。若手トリオもそろそろ生活になじんだか、ごそごそと行動を開始。ミスター日本のIKは、ジャカルタの街にまったくそまることなく、短パンにアロハシャツ、日本語のみの生活。

午後からKaHの努力によって、インドネシア・ナショナルチームの練習を見ることができた。カルトノ、ハリヤントといった次代のエースたちと、女子はイメルダ、ベラワティを筆頭に、ダマヤンティ、イバナ、テレシャ、そしてTSお目当のチャン・ソー・ガンが汗を流していた。日本からシルバーボウル参加のため当地に来ている湯木

選手も一緒に練習をしていた。ミナルニとクリスチャンがコーチ。

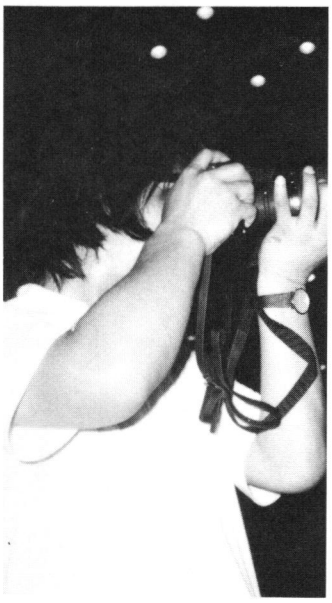
クラブの練習の行き帰りに子供たちが楽しそうに見物していたのが印象的。

見ているうちにプレーをしたくなったTN・MA・SSは外でランニング。その間にYSがKaHを通して翌日のコートを予約。

帰りはスナヤンから歩いてホテルまで。15分くらいで帰れるつもりだったが、結局30分近くかかった。途中、屋台がずらりと軒を並べて、日用品、食料品を売っていたが、ここでも「日本から来たのか、インドネシアは強いだろう」「日本ノーグッド」「リム・スイ・キンバグース」などと野次られっぱなし。せめて1人くらい勝ってくれればよかったのに……。

▼5月31日㈭ ミニ・インドネシアに観光に行くことになった。TSが知っているかぎりの単語を駆使して、電話でマイクロバスをチャーター。朝からスナヤンで練習していた人々をピックアップして、市内を巡りながらタマン・ミニ・インドネシア公園へ。明治村といったところだが、これといって面白いところでもなかった。自分がアレンジした関係でおとなしくしていたが、さすがに市内に戻るころにTSは「面白くもなんともないところだったナ」とポツリ。

ガイドが奥さんを二人もっていると聞いてYSは、「どうすれば二人もてるのか、四人までは許されるのか」と、外の景色には目もくれず質問をあびせる。「先生、ムリムリ、一人で我慢したほうがいいよ」と言ったのはMA。


編集長は最新鋭機で撮りまくる

▼6月1日㈮ 朝のインドネシアン・オブザーバー紙にMWの名前が出ていた。トマス杯の記事の中に「日本から、四人のジャーナリストが、5月28日に当地に到着。彼らは月刊誌〝ザ・バドミントン・ワールド〟の人たちである。四人のうち一人はレポーターで、ミス・ミワコ・ワカゾノというチャーミングな女性である」と書かれていたのである。最初にTNが発見。MWは大切にこの新聞をしまいこむ。(本当に〝チャーミング〟なんて書いてあったかなぁ？ それに四人のうち二人は、自費参加なのになぁ)

この記事のおかげで、夕方からの決勝を前に、体育館コートサイドでは、各国のカメラマンやレポーターが、バド界についていろいろな質問をあびせかけてきていた。

インドネシアとデンマークの決勝は、〝ベテラン、プリのものすごいがんばりも及ばず、日本とほぼ同じ内容で、4―0。

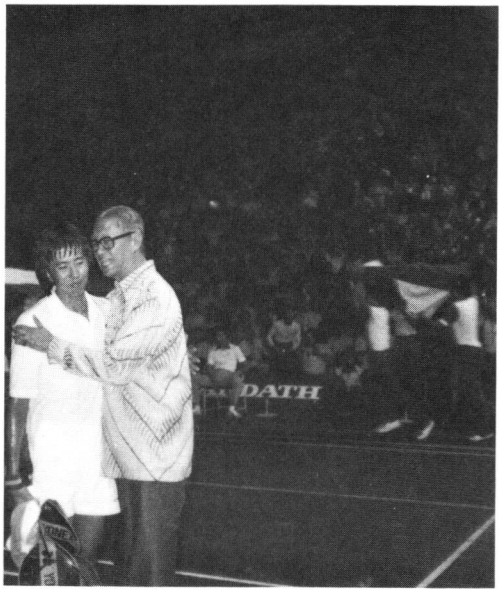
スミラットがプリを降した瞬間、何度も何度もガッツポーズで大きくジャンプをくり返していたが、試合後にこんなに体力を残しているとは……。

▼6月2日㈯ いよいよトマス杯大会も最終日。前日4―0とインドネシアがリードしたため、ハルトノで優勝が決まるというまい演出となった。デルフスの調子が悪く、ハルトノの一方など〝見せる〟プレーも披露した。

河崎ラケットの石丸氏の努力のおかげで、観戦しやすい席を確保できた一同、「インドネシアが強すぎたけど、見にきただけのかいはあった」と大満足。

夜は、翌日ひと足先に帰るIK・TN両氏を送るミニ・フェアウェル・パーティを開く。

IKしみじみと「こんなに楽しい旅行は生れてはじめてだ」とつぶやくと、全員いっせいに「いちばん楽しくした本人が言うとはね」。しかし、いろんなミスもあったが、たしかにひと味もふた味も違ったツアーでした。


優勝を決めて祝福を受けるハルトノ。うしろではチームメイトが国旗をかかげて走り回っている

的勝利。アシスタント・カメラマンとして活躍したKiHは、このハルトノの勝ちを見とどけると、「あとは、プリの曲打ちだけだな、楽しみは」と言っていたが、実際にそのとおりとなった。

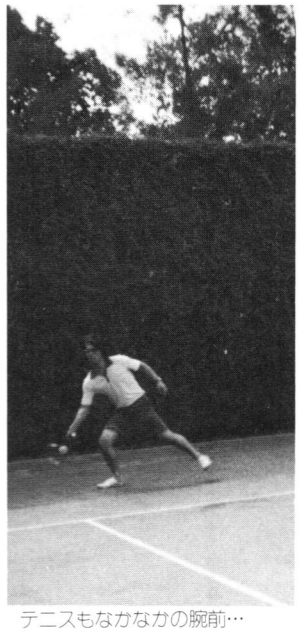
プリは開始早々、足をいためたが、よくがんばり、第2ゲームには足の間から後向きに返す

▼6月3日(日)　トマス杯も終り、そろそろ帰り仕度がはじまる。いつの間に会計になってしまったTSは、ルームサービスの清算やら、部屋割の調整やらで慣れない仕事に四苦八苦。「なんで、こんなことをオレがやらなけゃいけないの」とぼやく。

この日になって、RKに与えた抗生物質の薬が、じつは風邪薬のコンタック600だったことが判明。RKはまっ青。

そのRKをはじめ、KiH、SA、TW、TS、MWはプールサイドで日光浴にはげむ。さすがに南国の日射しは強く、またたく間に体はまっ赤になる。MWが得意のイヌっかきでプールをけんめいに〝横切る〟のが、非常に印象的でした。

夕方になると、この一週間もっとも練習熱心だったTWが、ホテル近くの野外コートへ遠征。〝ミスター・トヨタ〟という叫びで迎えられ、約2時間子供たちと国際親善。暗くなると屋台に使うようなライトを二つ持ち出してきて、ナイター試合となった。「こんな小さいときから暗くなるまで、バドミントンをやっているんだから、インドネシアは強いはずだ」と感心することしきり。


テニスもなかなかの腕前…
ではナカッタ

▼6月4日(月)　いよいよ正味この一日だけとなる。最初は「時間のたつのが遅くてまいったな、早く日本に帰りたいよ」などと言った人たちも、「もう少しいたかったな」と口をそろえる。ルームサービスの従業員とすっかりお友達になったSAは「あーあ、またあのゴミゴミした日本に帰るのか、イヤだな」と言っていたが、これは全員の共通した印象だと思う。



先に帰った2人と、シャッターを押した人は写っていません。
帰国直前のハリムで

インドネシア特有のタバコのにおいも慣れたし、こののんびりしたペースにも合ってきただけに、帰るのが寂しい気もする。ただMWは、「もう限界だわ、早く東京に帰っておいしい水割りを飲んで、ホッケとニシンを食べたい」だって。

翌日は、午前5時に出発するので夜のうちに全部チェックアウトする。またまたTSは苦戦。しまいには、キャッシャーに向かって、日本語で「明日は出発が早いから全部シメてほしんだけど、わかりますか？　ドゥ・ユー・アンダスタンド？」。キャッシャーはひとこと「アイム・ソーリー」。

イライラをはっきりと態度に出しながら、身ぶり手ぶりでようやくすべてのチェックアウトを完了。

SA、MW、KiH、RK、TSは、お互いの疲れをいやすために、日本料理「ふるさと」へ出かけ、スキヤキ、しゃぶしゃぶにビールで乾杯。

とにもかくにもお疲れさま。ミスター日本の称号をもらった笠原さん、早朝のジョギング、昼間のシャトル打ちとがんばった渡辺さん、切符紛失・盗難といったアクシデントの中でも、笑顔をたやさず学生をまとめた関根さん、学生らしくエネルギッシュに動き、楽しんだ日体トリオの沼沢君・浅沼君・坂井君。最年少ながらもっとも〝市民外交〟に活躍した喜多君、雑用もイヤな顔せずアシストしてくれた疋田さん。

呼び掛けたばかりで、あまり役に立たなかった幹事役の四人（赤星・瀬戸・平井・若園）から、お礼を申し上げます。

持ち回りで日記をつけてきましたが、ここでこれもシメ。

楽しい10日間でした、またお会いしましょう。


サヨ～ナラ～

トマス・カップの歴史

一九七九年ジャカルタで開催のトマス・カップ・トーナメントは、イギリスの貴族ジョージ・トマス卿にちなんで命名された有名なトロフィーを争う、数えて十一回目の大会である。

トマス・カップ選手権大会の発足は一九四八年、イングランドのプレストンだった。しかし、この物語の発端は、一九三九年三月の国際バドミントン連盟の実行委員会にさかのぼる。席上、ジョージ・トマス卿は、IBF会員国のチームによる選手権試合の開催を、提案した。そして、このために、バドミントンの覇者のシンボルとしてりっぱなカップの提供を申し出、この提案は一九四〇年のIBF年次総会で認められた。

しかし、第二次世界大戦のために、第一回の選手権大会が行われたのは一九四八年となり、その間、すでに製作されていたカップは、銀行で保管されねばならなかった。

チャレンジ・カップをめざしての競技会は三年ごとに開かれ、予選が四つの地域にわかれて行われる。四地域の優勝国と前回の大会での選手権保持国が、新しい「選手権保持国」のタイトルをかけて対戦する。

これまでタイトルを獲得した国は次のとおりである。

（開催地）

一九四九プレストン　マラヤ
一九五二シンガポール　マラヤ
一九五五シンガポール　マラヤ
一九五八シンガポール　インドネシア
一九六一ジャカルタ　インドネシア
一九六四東京　インドネシア
一九六七ジャカルタ　マレーシア
一九七〇クアラルンプル　インドネシア
一九七三ジャカルタ　インドネシア
一九七六バンコク　インドネシア

ジョージ・トマスは一八八一年トルコのイスタンブール近くのテラピアで准男爵家の七番目の子として生まれた。十八歳からバドミントンのラケットを握るようになり、父親は息子が高名なバドミントン選手になってほしいと言っていた。ところがそのデビューを飾ったあるトーナメントで選手権をとって間もなく、父親は世を去り、その後の息子のめざましい活躍を見ることはできなかった。ジョージは着実に次々と選手権を獲得していった。全英選手権で四回連続（一九二〇、一九二一、一九二二、一九二三）、国内レベルでも九十の選手権をとっている。

一九三九年、国際競技会の定期開催の提案を行った時、彼はIBFの会長だった。

彼のバドミントン選手としてのめざましい業績と、バドミントン振興のための多大な貢献に対して、当時の国際スポーツ記者団体は、IBF選手権チャレンジ・カップを、ジョージ・トマス卿の名にちなんで、トマス・カップと名づけることを推奨したのだった。

台湾 IBFの会員資格を保持

ステラン・モーリン会長再選

台湾はIBFの会員資格を再び確保した。IBFから台湾追放の決議案は、短い討議の後、支持少数とみて、撤回された。

スウェーデン、メキシコ提案のこの決議案は、台湾がその名称を中華民国バドミントン連盟から台湾バドミントン連盟に変更することに同意したため、スウェーデンがとりさげたのである。

決議案提出にあたって、スウェーデンのヨハンソンは次のように述べている。

「台湾はトーナメントの交流を妨げ、トマス・カップ、ユーバー・カップの開催を危くした。また、国際的な連盟の分裂にもその責任を負うべきである」

ヨハンソンは、トマス・カップでは台湾はアジアにあるにもかかわらずアメリカン・ゾーンを選択したこと。また、台湾との対戦をメキシコが拒否し、台湾の不戦勝となったことをつけ加えた。

台湾代表及びチーフ・スポークスマンのS・C・ジョーンズは、メキシコは、国内あるいはその他の中立的地域での台湾の試合を認めず、事態をいっそう困難にしていると述べた。

「バドミントンのために、われわれは不戦勝を認めた。台湾問題は政治的問題であり、バドミントンとは何ら関わりはない」

大会後、別の台湾代表C・Y・ワンはこう語った。

「中国のIBF加入に異議はない。しかし、中国は要求や条件を持ち出してはならない」

ソ連提出の南アフリカのIBF除名決議案は、南アフリカ代表欠席のため除外された。同代表にはインドネシア入国のビザが下りなかったのである。

本大会では、ステラン・モーリンが満場一致でIBF会長に再選された。副会長職も、留任となったが、WBFに移った四名の空席は、O・メルツ（デンマーク）、E・S・ジャレット（アメリカ）、P・E・ネルセン（デンマーク）、H・R・ウォード（オーストラリア）の選出によって埋められた。そのほか、日本の今北氏はじめ、数名の理事が選出された。

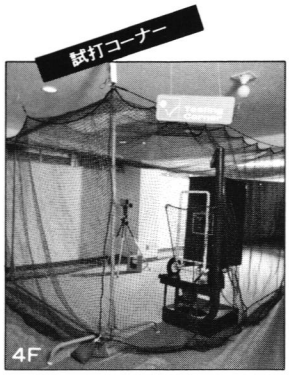
ずらり、4店勢揃い。

渋谷店

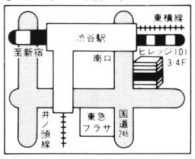
170坪

650㎡の広々とした店内でゆったりショッピング。
試打コーナーも人気上々。





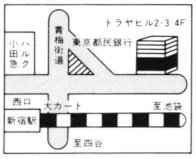
毎月曜日定休
●祝祭日を除く
東京都渋谷区桜ヶ丘町1-7（ヒレッジ101ビル3-4階） TEL 03-464-9251～2 〒150
●営業時間／午前10時～午後7時30分
●日曜・祭日は午後7時まで

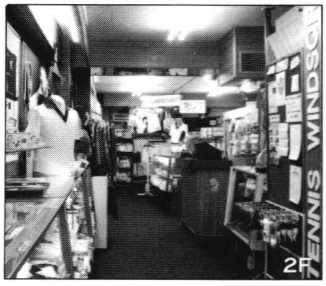


新宿店

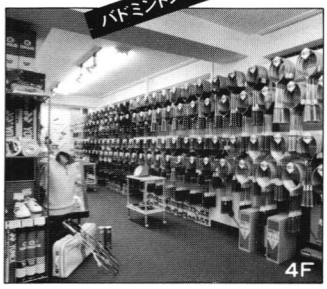
落ち着いた雰囲気でお買いもの。各階それぞれの
楽しさがいっぱい。

毎月曜日定休
●祝祭日を除く
東京都新宿区西新宿7-10-20（トラヤヒル2.3.4階） TEL 03-363-6848 〒160
●営業時間／午前10時～午後7時30分
●日曜・祭日は午後7時まで





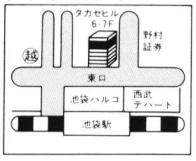




池袋店

つぶ揃いのテニス、バドミントン用品が
店内にあふれんばかり。

毎月曜日定休
●祝祭日を除く
東京都豊島区東池袋1－1－4（タカセヒル6・7階） TEL 03-989-0401 〒170
●営業時間／午前10時～午後7時30分
●日曜・祭日は午後7時まで







横浜店

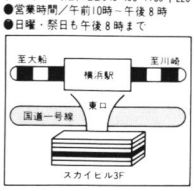
ラケット、ウェア、シューズ……すべてに豊富な品揃え。
選びやすい各コーナー。







年中無休
横浜市西区高島町2－1 横浜駅東口（スカイヒル3階）TEL 045-453-1785 〒220
●営業時間／午前10時～午後8時
●日曜・祭日も午後8時まで



日本最大のテニス·バド専門店
WINDSOR RACKET SHOP



ウインザー ラケットショップ。

TOKYO LETTER

by Miwako Wakazono & Carolyn Matsuura

On May 27, four of us from "The Badminton World" editorial staff and eight badminton fans who insisted on seeing the Thomas Cup '79 played in its home country, Indonesia, took off from Narita by Garuda Airways.

We landed at Denpasar, spent one night on Bali, and because of the time difference had a little longer than usual 26 hour day.

At night, we enjoyed watching the traditional dance of Bali and listening to their unique music with its drug-like effects. Seeing the Southern Cross for the first time was a deeply moving experience. Everyone smacked their lips and ate Indonesian food with great relish.

The following day our dearest wish was finally granted when we arrived in Jakarta and before we had a chance to settle down in our hotel, we were off to Senayan, the site of the Thomas Cup '79.

It was the first day of the semi-finals between Denmark, who had already beaten ace Prakash's team from India and advanced to the finals, and Japan, who on that day had defeated Canada.

Indonesia, as you know, is extremely hot so matches usually start from 7:00 at night. Before the matches started, the site was enveloped in enthusiasm and the cone-shaped Senayan was filled to overflowing with people who had come straight from work and children.

According to local newspaper reporters, there were about 15,000 people.

In Japan, it is quite difficult to attract such a large audience to badminton tournaments so we were deeply impressed and had to hand it to Indonesia where badminton is indeed their national sport.

When the tournament started, however, to our disappointment the matches were completely one-sided.

All K. Zeniya could do was to put up a good fight against Liem Swie King and with a score of 4-0, the first day came to an end.

In the third singles match on the second day, Rudy Hartono, who hasn't played in a title match for a long time, defeated T. Tsuji and Indonesia advanced to the finals.

The center of attention was Luis Pongoh, who at the early age of 18 made his first appearance at the Thomas Cup '79.

Holding the shuttlecock facing downward in his left hand, he serves and like magic, sends it flying up into the air.

In the first and second singles matches, he brought down Japan's K. Zeniya and M. Tsuchida easily and proclaimed his debut.

Luis' appearance undoubtedly showed us Indonesia's reserve of power and there is the possibility of the second and third Liem Swie Kings appearing on the scene in the future.

In contrast to Indonesia, Denmark is especially cold and due to the heat, F. Delfs, S. Skovgaard, and M.F. Hansen were not in the best condition. They were, perhaps, able to demonstrate only half of their usual strength. Among them S. Pri, who is very popular in Indonesia, was the only tenacious one.

Indonesia set an unequalled record of nine victories to zero in the semi-finals and finals and won the Thomas Cup for the seventh succesive time.

At any rate, rather than the tournament itself, what impressed us most was how highly badminton is regarded in Indonesia.

We would merely be walking down the street and people would call out to us, "Thomas Cup!" and "Kinji Zeniya!".

There is no doubt that Indonesia's strength is due to the amount of training the players go through and their constant efforts. We feel, however, that it is also due to the fact that badminton is very much a part of the lives of the people of Indonesia.

In any case, Japan should not just be astonished at Indonesia's overwhelming strength. We should make every effort to come at least even one step closer to matching their strength.

YONEX®

ボディの美しさから出発した、主張のあるスポーツウエア。
単にかたちだけに流れず、単に機能だけに片よらない、新しい発想のスポーツウエアの誕生です。デザインは、あの三宅一生。このほかヨネックスには、オリジナルなスポーツウエアや、日本バドミントン協会推薦のスポーツウエアをずらりそろえています。

プレイヤーの声から、使いやすさをカタチにしたバッグ達。
ヨネックスのスポーツバッグの大特徴は、それぞれのデザインに、用途別にセブン・スリー・ワンと3種類あること。長期遠征用・短期遠征用・当日大会用と使いわけることができます。バッグにT.P.O.を持ちこむなんて、ヨネックスならではのアイデアとは思いませんか。ともかく、ヨネックスでかためると強い。

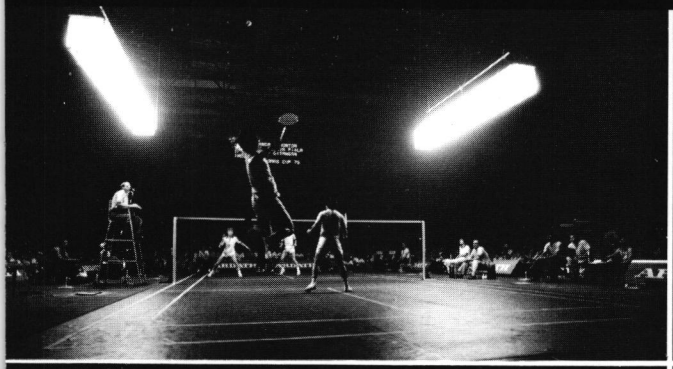
ヨネックスを着る。
ヨネックスを持つ。
勝てそうだぞ。

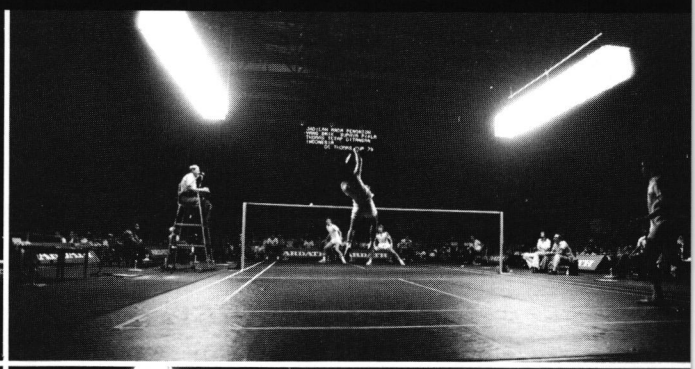
Flemming Delfs
フレミング・デルフス（デンマーク）



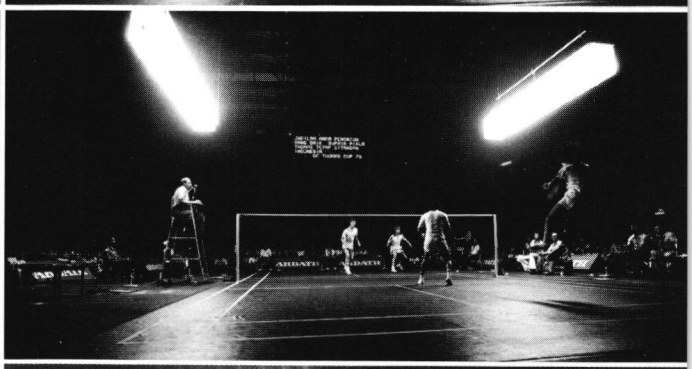
FLYING SHUTTLERS

跳んで●飛んで●翔んで●









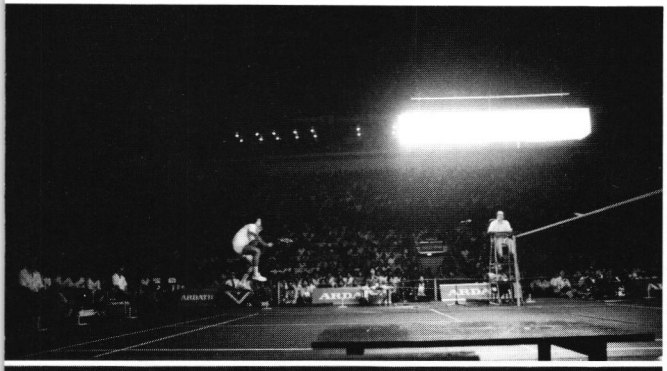
インドネシアのプレーをことばで表現するならば、速攻につぐ速攻と、すばやい切返し、そして壁のようなレシーブといったところか。

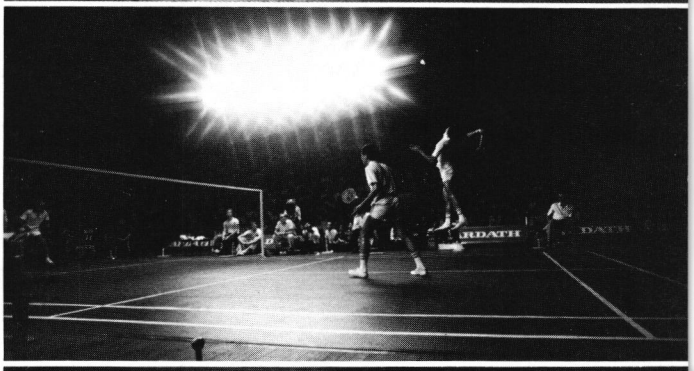
とくにその攻撃力はすさまじい。チャンスとみるや、シャトルが落ちてくるのを待つのももどかしく、強烈なジャンプ・スマッシュを叩きつける。

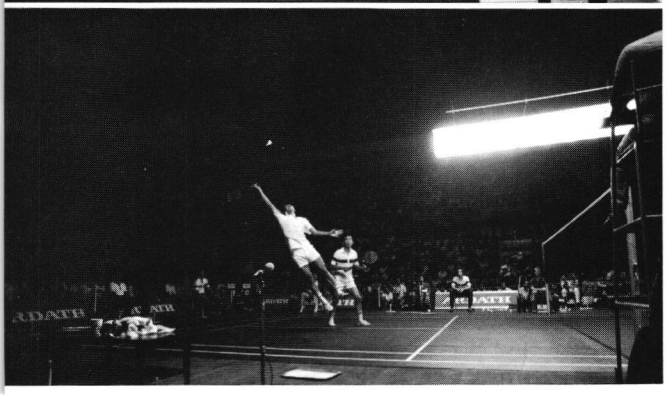
そして、どんなにジャンプしても、着地でくずれるようなシーンはまったくみられなかった。

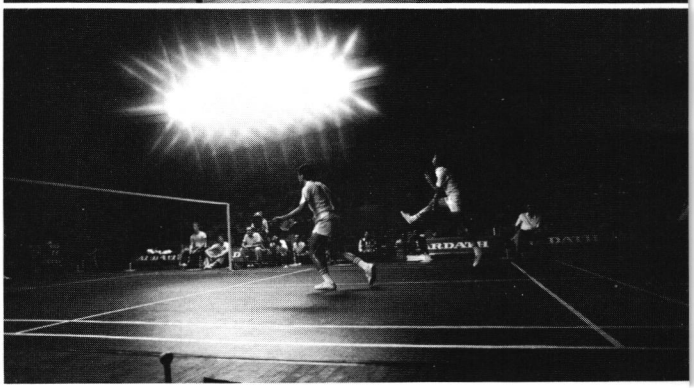
翔んでる彼らの姿を、じっくりとごらんください。











kawasaki
河崎ラケット工業株式会社



選択の時代は終った!

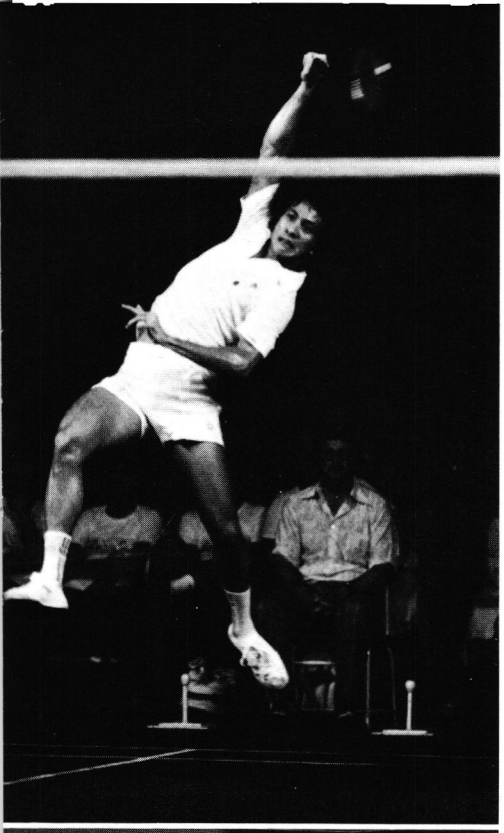
kawasaki Badminton

数あるバドミントン・ラケットの中
カワサキ製品は
ひとり群を抜いた。永い独走が始まる。





グラファイトシリーズ
世界初のオールグラファイトラケット
エイトシックス
グラファイトフレーム　グラファイトシャフト
黒(ケース付)
フレーム価格12,000円



キング・オブ・キングス

リム・スイ・キン
Liem Swie King

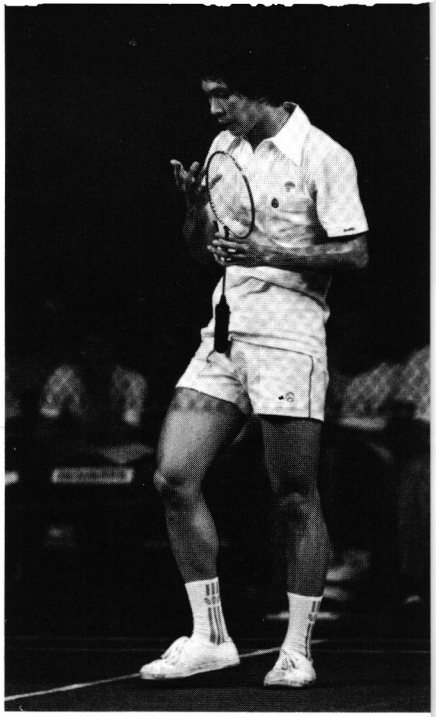
1956年2月28日生れ。いまや名前のKingをもじって、King of Kingsとまで呼ばれている。日本の銭谷、土田、デンマークのブリ、ハンセンに対しても、つねに圧倒的な優位に立ってゲームを進めた。

筋肉の標本を思わせるような足腰、腕はまるでサイボーグである。

典型的な攻撃型プレーヤーでありながら、コーナーぎりぎりをつくコントロールにも抜群のものをみせるようになった。

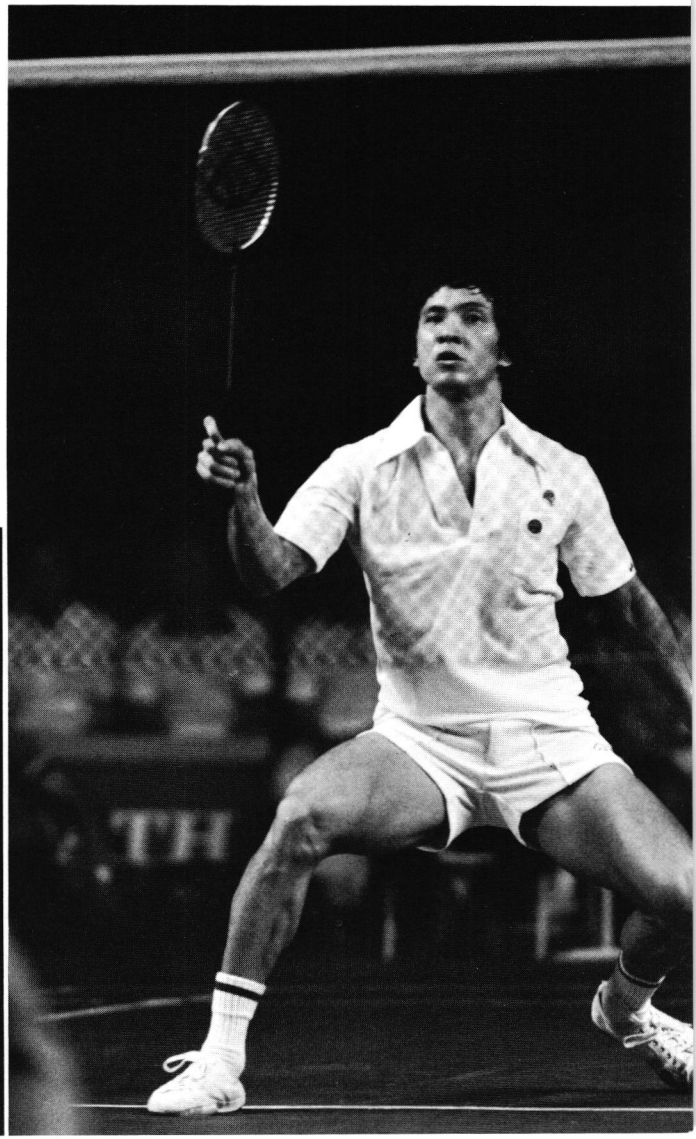
レシーブについては、ほとんどバックスイングをせず、ラケットをいきなり突き出すという感じである。

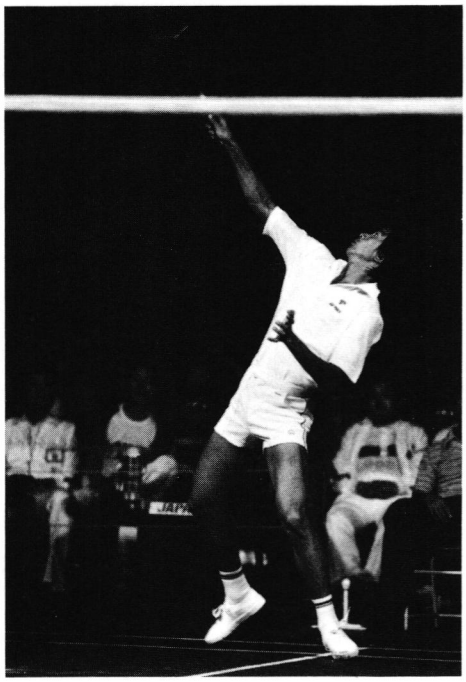
年齢から考えても、彼の時代は始まったばかりといえよう。

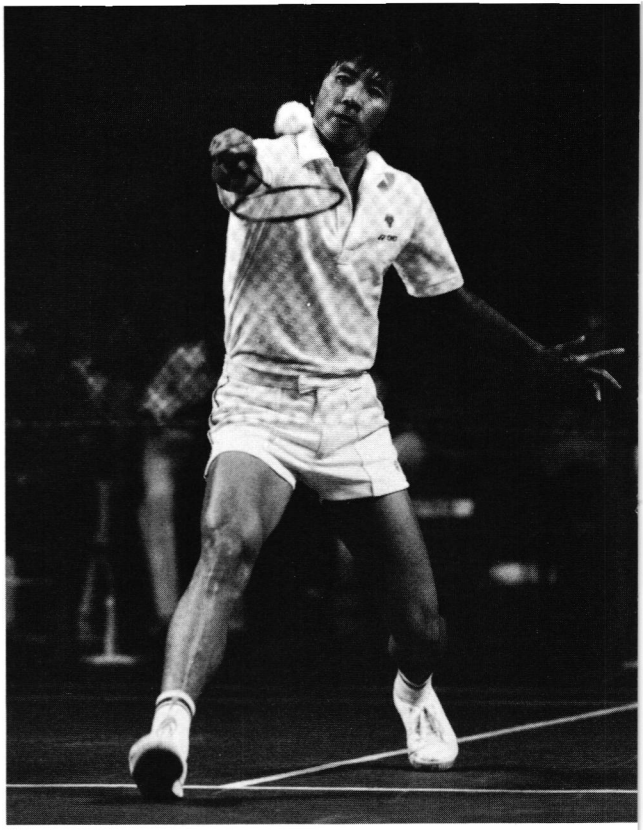












これからが楽しみの18歳

ルイス・ポンゴ
Lius Pongoh

1960年12月３日生れ。これといった実績もなく、いきなり大舞台に登場。インドネシアのヒーローづくりに、みごとに乗ったデビューだった。

抜群のスタミナは、インドネシアチームの中でも随一というが、まだまだこれから伸びる余地は十分である。

リム・スイ・キンに心底あこがれているのか、フォームはそっくりである。しかし、シャトルを逆に持って、卓球のようなショートサービスを打つなど、意欲満々である。

日本戦で２勝をあげ、大観衆に祝福されると、その童顔をテレくさそうに伏せたのが印象的である。

伝説的ヒーロー

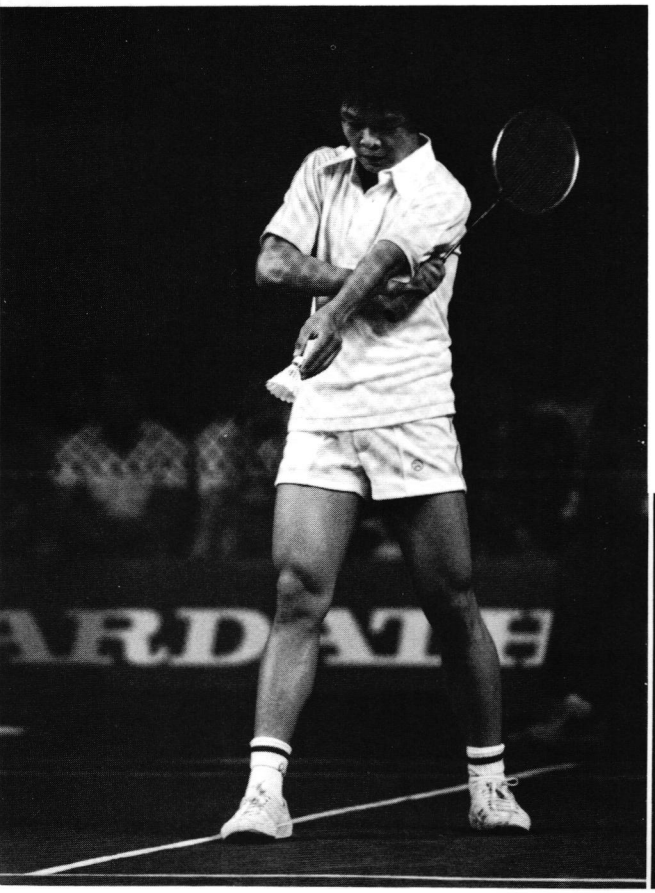
ルディ・ハルトノ
Rudy Hartono Kurniawan

1948年８月８日生れ。あらためていうまでもなく、全英選手権８回優勝（うち７回は連続）という伝説的存在、まさに〝神様〟である。

すばらしいコントロールと鉄壁のレシーブを誇り、どんな窮地に立っても、自分のペースをまったく失わないことは有名。

多くの選手が〝あと一本〟に泣かされてきた。

しかし、今大会では彼も長いブランクの影響と年齢的衰えもあり、コートで足をすべらすシーンもあった。それでもなお，相手にポイントを連続して与えないところは、〝神様〟であり、彼の伝説はますます強められたのである。






Flemming Delfs
フレミング・デルフス（デンマーク）
興奮する。
YONEX®



いま、世界は95gに

なんと100g以下のフルカーボンシャフトラケットの登場。世界で最軽量のラケット、カーボネックス8です。フレームは特殊アルミ合金。シャフトはフルカーボン。強烈なパワーを秘めながらこの軽さは、まさに世界新。ヨネックスならではのクリエイティブです。いま、バドミントンプレイが二歩も三歩も前進します。このヒーローの登場で。

ラケット重量極限の壁をついに破った
FULL CARBON SHAFT RACKET

B-8500 Carbonex8

カーボネックス・エイト(3色 イエロー・オレンジ・グリーン)
重量表示 1-U(100g～95g)・2-U(95g～90g)





オールカーボンシャフトとウッドフレームによる

世界初の超軽量

XL級 105g〜109g

コンピュータとキャリアが生み出した
100％カーボン・ロングテーパーシャフト
軽さと強さをかねそなえた
スーパーラケットの登場！

Carbon Slugfest

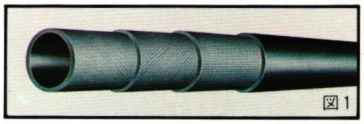
カーボンスラッグフェスト　B-85・B-80

日本バドミントン協会推奨

■プレーヤー待望のパーフェクトラケット完成

より高度に、そして多彩になっていくバドミントンのプレーテクニック。そのすべてのプレーに一本のラケットがパーフェクトに対応します。ゴーセンが開発した100％カーボン・ロングテーパーシャフト『カーボン・スラッグフェストB-85・B-80』。プレーヤーの強い要望に応えた理想のラケットの登場です。

■電子頭脳が答えた理想の構造


図1

20世紀の科学が生んだ最高のラケット素材《カーボン》。このカーボン繊維を、ラケットの生命といわれるシャフト部分に使用。この素材特性をいちばん効果的に発揮させるため、図①のように方向の異なる繊維を3層に組み合わせました。この構造図式は、理想のラケットを創り出すという前提のもとに、コンピュータがはじき出した答えです。

さらにもう一歩理想に近ずくため、この構造によるシャフトのロングテーパー化をコンピュータは指示しました。

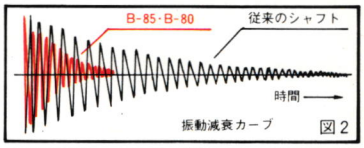


図2

最良の理論——これを製品として実現させたのはゴーセンの技術力。カーボン究極の特性を安定して確保し、世界でも類を見ない100％カーボン・ロングテーパーシャフト化に成功しました。

■カーボン・ラケットの決定版

細部にわたる測定テスト。このB-85・B-80はすべての点で他のカーボン・ラケットをしのぎました。カーボンの特性をこれほど完璧にいかしきったラケットは見当りません。



■B-85・B-80の特色

- 超軽量XL級(105g〜109g)
- 高反発／高弾性（強く、鋭い打球）
- 高強度（優れた耐久性）
- 迅速な振動減衰性（打球後のラケットの安定。図②参照）
- 高応答性（打球の手応え）まさに長所総づかみ。

カーボン・ラケットの決定版！堂々と登場です。

カーボンスラッグフェスト

B-85(黒)・B-80(白) **¥7,500**

- バンブー・ウッド合板
- 100％カーボン・ロングテーパーシャフト
- カバー付



B-85・B-80・モニター募集

- **募集人員**　10名（多数の場合は抽選）
- **申込期限**　8月10日（消印有効）
- **申込方法**
  ハガキに①製品名②住所③氏名④学校名もしくは所属クラブ名(会社名)⑤ご利用のショップ名を明記して下記へ。
- **申込先**
  〒540 大阪市東区豊後町4 株式会社ゴーセン
  モニターBR7係　☎06(942)-5816(代)
- **発表**　本誌9月号に掲載

GOSEN

本　　社●〒540 大阪市東区豊後町4　☎ (06)942-5816(代)
東京支店●〒111 東京都台東区蔵前4-14-2　☎ (03)862-6576(代)
福岡営業所●〒810 福岡市中央区薬院1-4-8　☎ (092)712-5247(代)
北陸営業所●〒921 石川県金沢市横川7-22　☎ (0762)47-0200(代)



反発の創造。

ゴーセンバド・ガット●ウインテックスシリーズ／ハイ・シープシリーズ

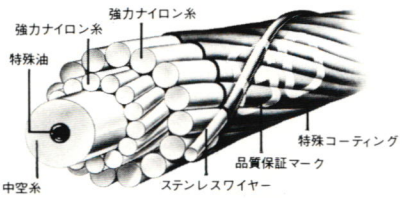
世界に誇るゴーセンのガット技術。

世界15か国でパテントを取得！

世界的なガットスペシャリストGOSEN。その証明は世界15か国におよぶパテントの取得。日本はもとより世界各地のファンを魅了したガットの数々。それはまさにゴーセンならではの技術における《完成度の高さ》を示すものです。

■中空糸・特殊油入り(PAT. 1106964)

糸の芯部分を空洞に。この中空部分が打球に鋭い反発を促進。また打球音・打球感も抜群なものにします。この中空糸の中に特殊油を注入。この油がガット表面に粘着し、油まくがガットを外気（乾燥、湿気など）から守り、ガットコンディションを完全キープ。



■ステンレスワイヤー巻き付け(PAT. 1212170)

ガットにワイヤーを巻き付け。ワイヤーは一定間かくでらせん状に糸に食い込み、ガットを強く張った状態に固定。ガットの伸びやゆるみを防止。強い打球を促進。

このように特許を取った技術の他にもゴーセンは●**カーボン混入**●**ゲージの超細化**など他にはマネのできない技術でプレーの向上に貢献しています。

Wintex WIRE ウインテックス・ワイヤー

No.1900W……¥800 (10m・ゲージ0.85㎜)
●超強力糸●中空・特殊油入り
●ステンレスワイヤー巻き付け

ゴーセンの技術ノウハウをすべて傾注。スーパーガットとして仕上げました。中空・特殊油・ワイヤーの効果がそれぞれに相乗して、抜群の反発力を生み出します。同時にパワーとスピードにあふれた打球をも可能にし、まさにオールマイティ。多様化するバドミントンのプレーテクニックにみごとに対応できるガットです。

油・ワイヤーにより乾燥や湿気もシャットアウト。常にベストのガットコンディションでプレーにのぞめます。



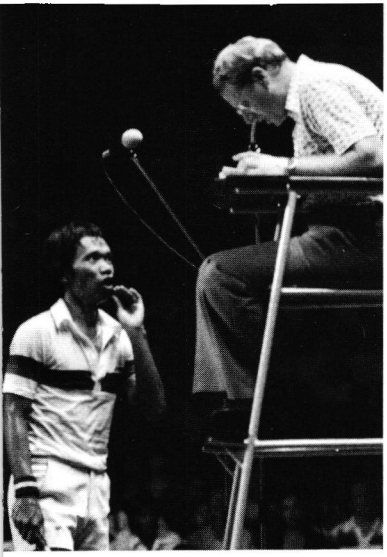
Wintex WIRE モニター募集

■**募集人員**　10名（多数の場合は抽選）
■**申込期限**　8月10日（消印有効）
■**申込方法**　ハガキに①製品名②住所③氏名④学校名もしくは所属クラブ名（会社名）⑤ご利用のショップ名を明記して下記へ。
■**申込先**
〒540 大阪市東区豊後町4 株式会社ゴーセン
モニターBG7係 ☎06(942)-5816(代)
■**発　表**　本誌9月号に掲載

※類似品にはくれぐれもご注意ください。

GOSEN

本　　社●〒540 大阪市東区豊後町4　☎(06)942-5816(代)
東京支店●〒111 東京都台東区浅前4-14-2　☎(03)862-6576(代)
福岡営業所●〒810 福岡市中央区薬院1-4-8　☎(092)712-5247(代)
北陸営業所●〒921 石川県金沢市横川7-22　☎(0762)47-0200(代)



意地と涙と

イイー・スミラット
Iie Sumirat

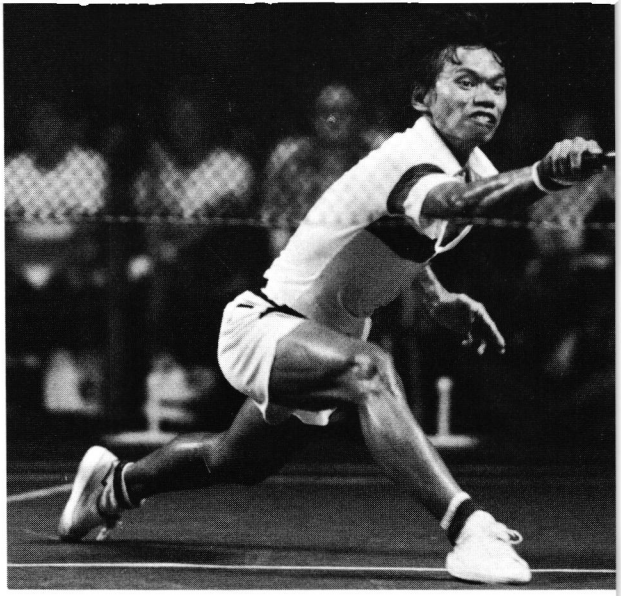
28歳。性格的なものから、実力はありながら、協会内部で批判されることが多く、今大会でも、対日本戦では、ルイスにその座を追われてしまった。

しかし、決勝ではトップに起用され、その不評を吹き払う活躍をみせた。

連続してミスするなど集中力を欠く場面もあったが、なんとしても勝ちたいという執念が実を結び、2勝をかせいだ。

ブリを破った瞬間、コート内でガッツポーズをとり、ベンチに走って戻るとコーチの胸に顔をうずめた。

控え室で涙を流しながら記者の質問に答えていた姿も忘れられない。



歴史に残る名プレーヤー

クリスチャン・ハディナタ
Christian Hadinata

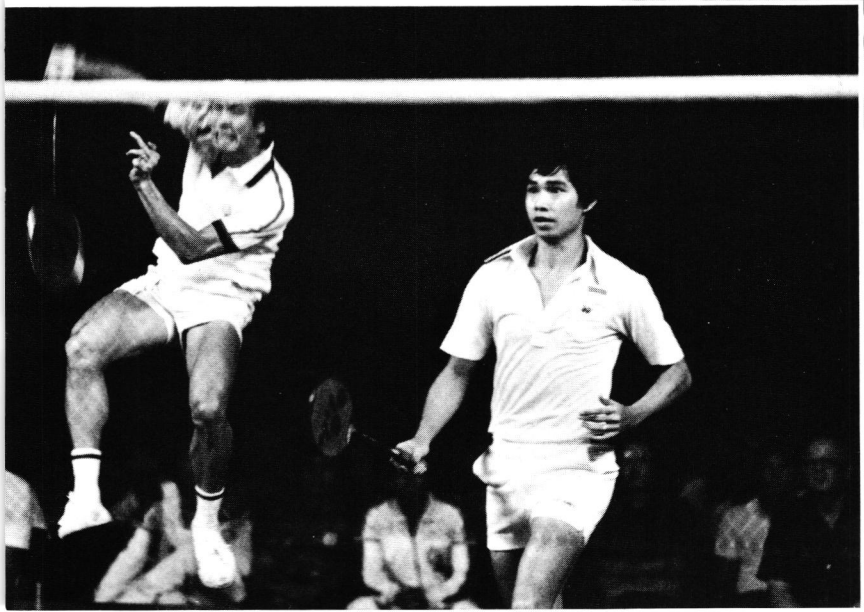
1952年10月4日生まれ。温厚な性格は、インドネシア国内はもちろん、外国でも多くの人々に愛されている。プレーもすばらしいカンのよさで、世界史上でも屈指のダブルス・プレーヤーである。

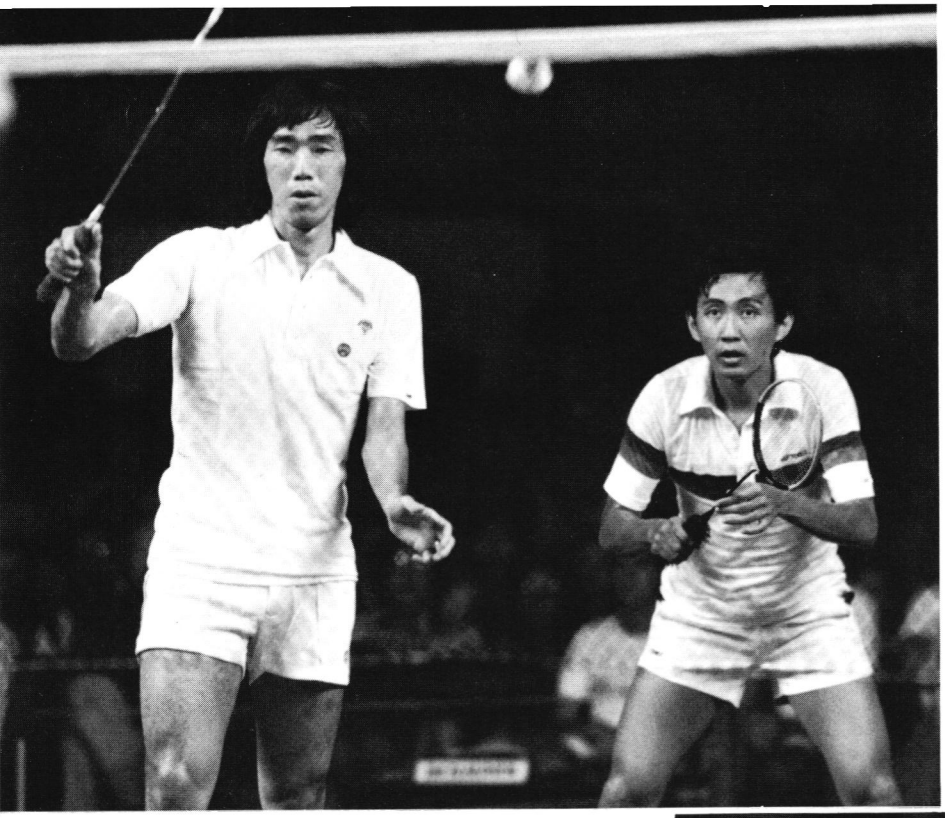
今大会ではリム・スイ・キンとペアを組んだが、その強打を引き出すよう実に巧みな前衛ぶりであった。

昨年秋に美人の奥さんをもらい、女性ファンをがっかりさせたのも有名。

現在、国内女子チームのコーチをミナルニとともに担当しており、彼の育てた名女子プレーヤーが登場するのも間もないことであろう。







動物的カンの持ち主

チュン・チュン
Tjun Tjun

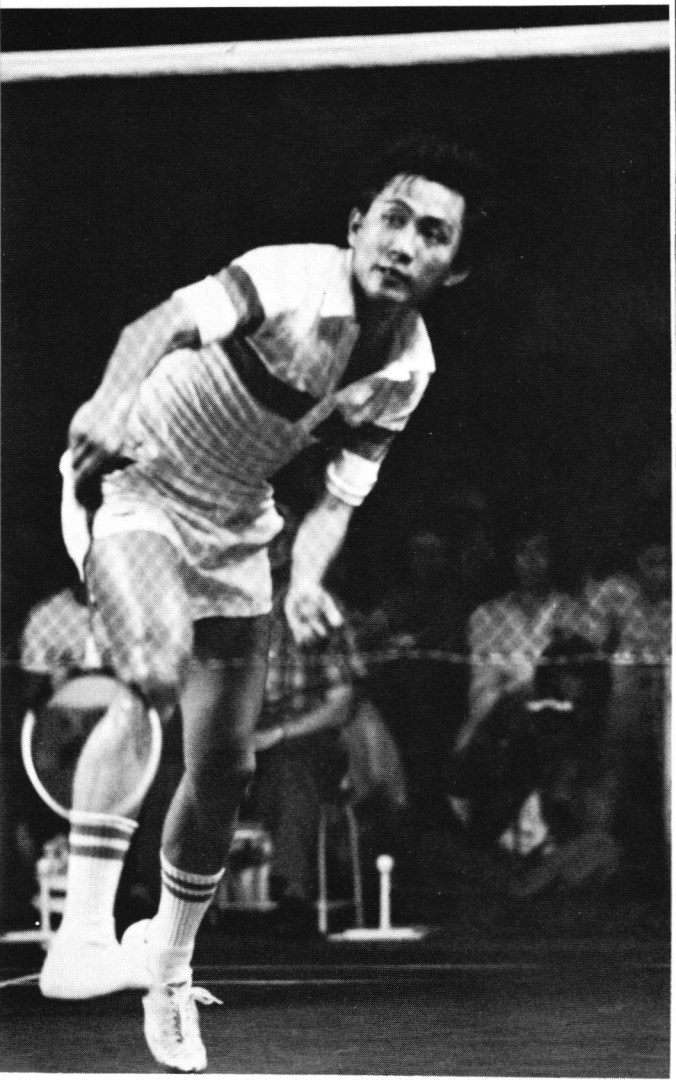
1952年10月4日生まれ。まさに動物的という表現がぴったりの天才プレーヤー。

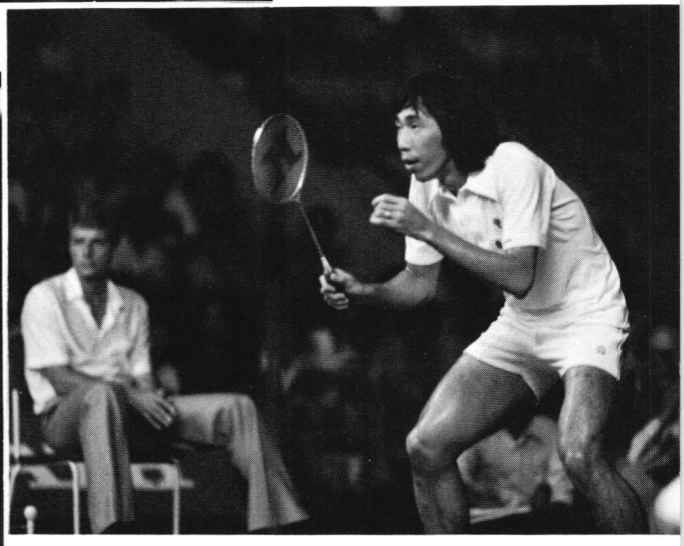
独特のレシーブ体勢からどんなボールにても瞬間的にとびついてしまう。

自分の顔より上にきたシャトルはすべて攻撃し、レシーブでさえも、並みのスマッシュを数倍上回る威力をもっている。

中国女子のエース梁秋霞は彼の姉であるが、国内政変以来ずっと別れ別れとなっている。

そのすばらしいプレーとは対照的に、ウェアやシューズなどにまったく無とんちゃくなのも有名。





待たれる体調の回復

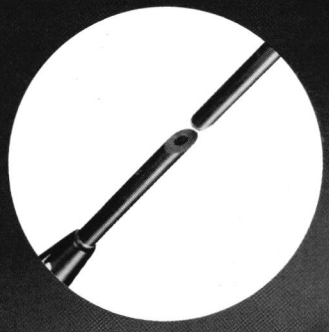
ヨハン・ワジュディ
Johannes Wahjudi

1953年2月10日生れ。チュンチュンとペアを組み、全英選手権を5回制している。

昨年暮れあたりから不調がつづき、今回も風邪をひくなど冴えを欠いていたが、それでも相手をよせつけないのはさすが。

早く体調をととのえ、センタコートに復帰してもらいたいものである。







CARBO DELUXII

S-79

新製品

カーボデラックスII

カーボデラックス同様、オールカーボンシャフトを使用し、特殊合金フレームをプラスして全て新しいタイプのラケットとして、ここに誕生しました。より軽くそしてよりスピーディでパワーフルな条件をすべて兼ね備えたまさに現在にマッチした、最高のラケットと云えましょう。あなたも最高のラケットでプレーしてみませんか？

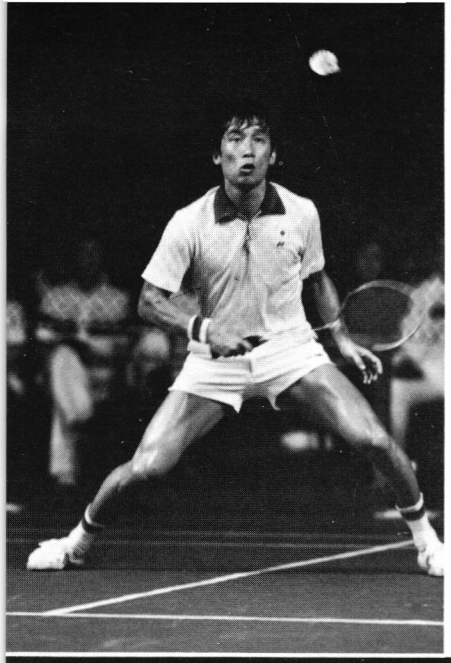
CARBO DELUX

S-77

カーボデラックス

スチールカーボンシャフトとは違い、純然たるオールカーボンシャフトを使用。その弾力性は従来のスチールシャフトにないすばらしい反撥力を生みだし、多くの反響を呼んでおります。シャフトを若干太くすることにより左右のブレを解決していますので、アタックにレシーブにこの新しい魅力を十二分に発揮させて下さい。

SunBatta



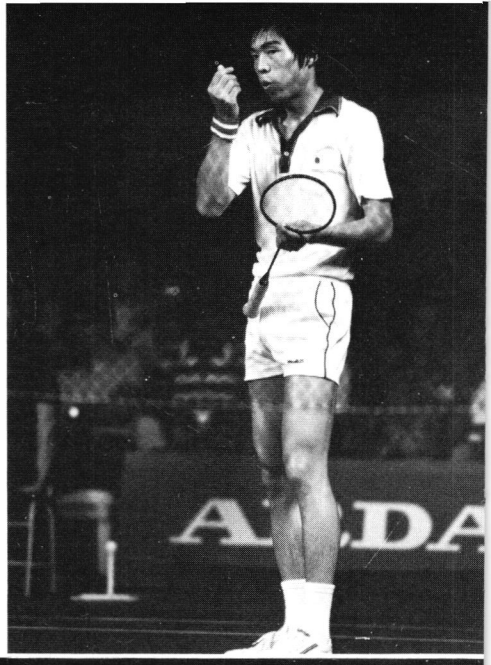
転機は到来した

大会一週間前にジャカルタ入りし、入念な準備を積んだ日本チームだったが、インドネシアの堅城はビクともしなかった。

銭谷、土田、辻のシングルスもそれぞれ健闘はしたものの、善戦どまりであった。ダブルスはさらに実力差が歴然としていた。

カナダ戦で長谷川のシングルス、辻・尾崎のダブルスを起用したが、対インドネシア戦でこそ若手に出場のチャンスを与えてほしかった。

暑さ、風、シャトルの悪さ、観客の応援などを乗り越える精神力と体力の養成に、全力で取り組むときがきたようだ。







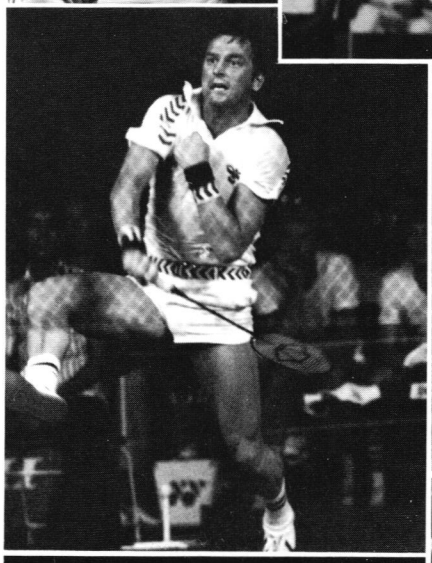
ついに実力は出ずじまい

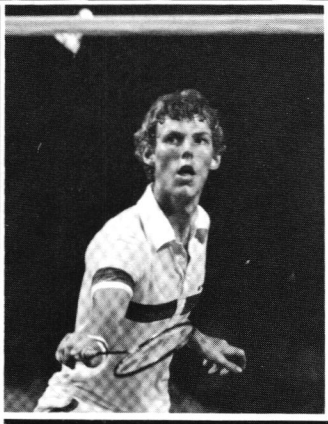
暑さに弱いと〝定評〟のあるデルフスは、まさにその評を裏づけてしまった。完璧なまでのバックハンド(perfect backhand)はがねの手首（wrist as steel）といわれたブレーは、すっかり影をひそめていた。ダブルスでも空振りするなど、気の毒なほどの不調だった。

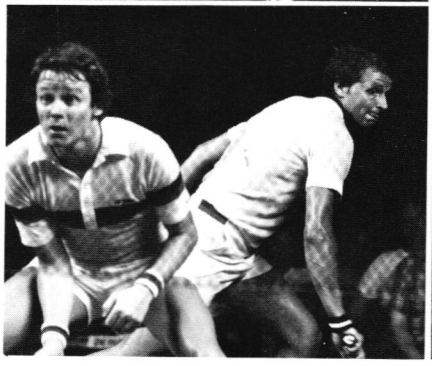
国内ではすでにデルフスと肩を並べたといわれているハンセンも、若さ（21歳）を暴露したかたちでポイントをあげられず、32歳のブリのがんばりも、ついにはスタミナ切れとなった。

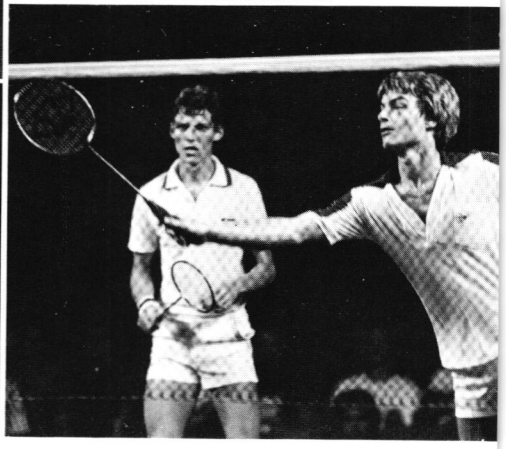
観戦中のエルランド・コプス、フィン・コベロ、トム・バッカーといったかつての名選手たちは何を思ったであろうか。

次回は北欧で開催されることが濃厚であるが、全英選手権の例をみるまでもなく、寒い中でもその力を発揮するインドネシアをくいとめるために、どんな施策を立てるか、興味深い。





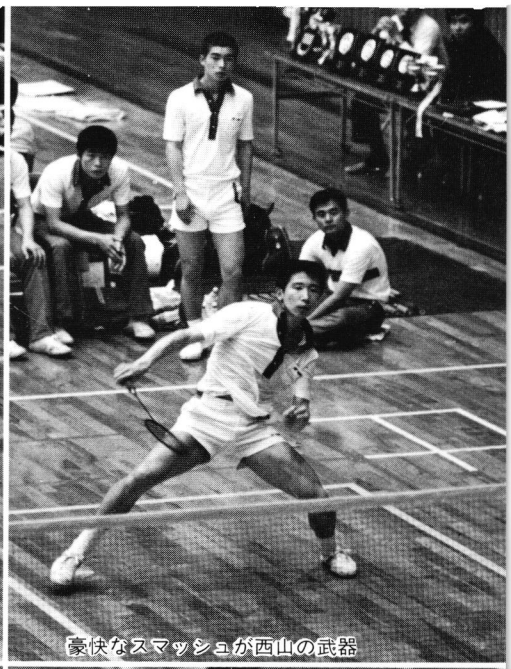




関東学生春季リーグ戦の熱戦から



うまく持ち味を生かし合う冨田・酒井組



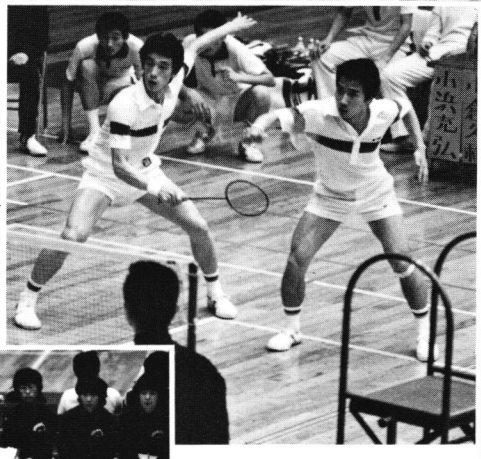
豪快なスマッシュが西山の武器





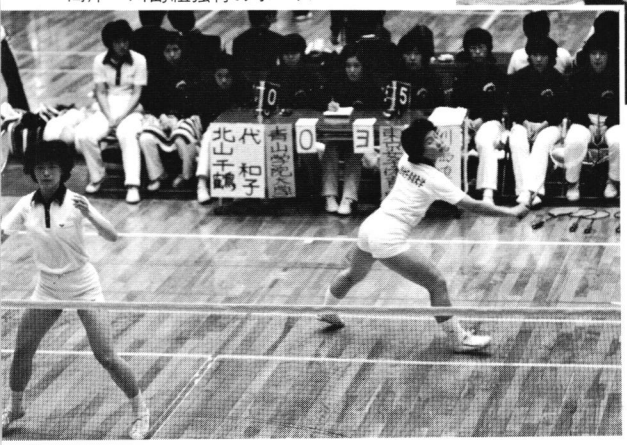
西山を倒したただ1人の男・浅沼

▲喜びの日体大チーム、かろやかに(?)ステップを踏む



▶宮森・峯組のがんばり

▼高岸・川島組独特のポーズ





▶さすが主将!!鹿野

座談会　昭和54年度春季リーグ戦をふりかえって

気力充実の法大が僅差で優勝



女子は日体大が混戦を制す

▶出席者

渡辺雅人（全日本学生バドミントン連盟委員長）
野口浩造（関東学生バドミントン連盟委員長）
川上隆庸（全日本学生バドミントン連盟副委員長）
朝倉康善（関東学生バドミントン連盟委員）

▶司会

若園三輪子（本誌編集部）

最大のヤマは〝魔の三日目〟

本誌　春季リーグ戦も無事終了し、現在は関東学生選手権が始まっているわけですが、そのリーグ戦をふり返ってみようと思います。

野口　今季は戦前の予想どおりぶ違った結果になったと言えるんじゃないかな。

渡辺　あの予想（プログラム掲載）でもずいぶん僕は批判されたし……。

本誌　一番大きな点は、早大が青学に負けたということね。

朝倉　そうなんです。あれは意外というかショックだったな。

野口　やっぱり早大は一日目の対中大戦に全力を傾け、それに勝ったということで、無意識のうちに油断があったんじゃないかな。

渡辺　二日目の日体戦も同じスコアの5―2で勝ったし、まさか青学に、という気があったのは事実だろう。

朝倉　初日、二日目と勝って、そして魔の三日目……。

本誌　その魔の三日目、早大対青学の分析を。

渡辺　オーダー的には、ほぼ真正面から当ったと思うな。林田×石黒、小浜×平野、尾山×橘川。

野口　林田は九州学院、石黒は熊本高ということで、高校時代からのライバルだからね。

本誌　この林田の勝ちは当然しやないの？

渡辺　いや、互角と思っていたのが、林田の圧勝でやや意外な内容だったと思う。

朝倉　でも最初の一本落とした時点でも、別にそれほど深刻なダメージではなかったんだけど。

野口　現に平野は小浜をファイナルの末破ったし、第1ダブルスも石黒・橘川で確実にポイントをあげているしね。

流れを変えた尾山のがんばり

本誌　ダブルスを終えたところで3―2と早大リード。このあとの2ポイントが大きなヤマになったわけね。

渡辺　ダブルスで青学は豊長と虎枝（いたどり）という新人を起用していたし、橘川が一気にここで勝負をつけると思っていたんだけど。

野口　これは両校ベンチも正直なところ橘川の勝ちと見ていたと思うな。

渡辺　それがファイナルに持ち込みながら、セッティングの末敗れ、最終の水内にプレッシャーがかかったんじゃないかな。

野口　早大にしてみれば、当然勝てると思っていたのが最後までもつれた。一方の青学は初めから負けてもともとのムードでリラックスしていた。この差じやないのかな。

本誌　なんといっても尾山のがんばりが、流れを変えたということかしら。

朝倉　そうなんですよ。

まさにガッツの宮森

本誌　今季最大のポイントとなった早大×青学戦のことはこれくらいにして、優勝した法大について。

野口　法大の優勝はメンバーからみても、かなり順当な結果だと思う。

渡辺　冨田を中心に、宮森、酒井といった布陣は、安定感ではトップだね。

朝倉　まあ中大に敗れはしたものの、あとは勝つべき人、ペアが確実に勝ったということですね。

川上　冨田が対中大戦で西山に勝っていれば、完全優勝だったんだけど。

▼渡辺雅人（慶大）



本誌　その西山を破ったただ一人の男・浅沼とその日体大については。

野口　日体はもっとがんばると思ったが。

川上　沼沢の故障が大きかったね。

渡辺　沼沢が完調だったら、もうひと波乱あったかも知れない。

朝倉　坂井も善戦はするんだけどあと一歩が。

本誌　日大の存在が何かもうひとつ冴えないという感じだったけれども。

野口　うーん。

渡辺　坂本の孤軍奮闘といったところかな。

本誌　では一応ここで男子の総評というか、まとめを。

野口　なんといっても早大の意外な低調ぶり。

川上　自分の学校だからいうわけではないけれど、法大の気力充実を評価したい。

渡辺　とくに宮森がよかった。

野口　そうそう、宮森のがんばりはすごかった。スマッシュなんかコートでワンバウンドして相手のベンチに入るほどだったよ（笑）。

本誌　やっぱりガッツ&フェアープレー賞は、とるべくしてとったということかな。

朝倉　そういうことですね。

フロックではない東女体の勝利

本誌　それでは次に女子に目を向けてみると。

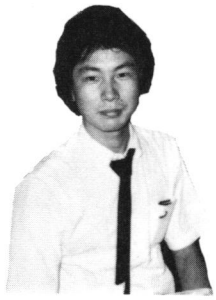
野口　僕は日女体が勝つとみていたんだが。

渡辺　日女体が東女体に負けるようなことがなければ、おそらく日体にも勝っていたと思う。

▼野口浩造（明大）



▼川上隆庸（法大）



川上　やっぱり日女体×東女体がヤマだったね。

本誌　それも5―0のスコアは意外も意外。

野口　石田がトップに出て、高岸にファイナルで負けたわけだけど、あれでもうすっかり歯止めがきかなくなった感じだな。

朝倉　第1ダブルスを除いて、あとの四試合はすべてファイナルなんですよね。

本誌　せって勝ったとなると東女体の勝利はフロックではないということかな。

川上　渡辺の不調というか、気力の点で物足りなかった。

渡辺　東女体が石田をさけることなく、高岸をぶつけ、それでトップに勝ったということが、グッとチームを盛り上げることになったと思うな。

野口　強気にオーダーを組んで勝った、それッあとにつづけ、ということだね。

鹿野のがんばりが優勝へ導いた

本誌　それでいて東女体は日体に負けてしまったのはどういうわけなのか。

野口　2―2で最終シングルスに持ち込まれ、日体の主将・鹿野（4年）に対し、2年生の川島では、いかにも荷が重すぎたということだ。

川上　川島は気の毒なくらい緊張していたね。

朝倉　2年生にはそのプレッシャーを破れないと思う。

渡辺　鹿野はこのほか、日女体戦でも同じ状況で、内田に勝っているし、主将として十分に力を出したね。

本誌　上位の三校を除くあとの三校について。

野口　四位の青学は、荒木のアキレス腱断裂という不運もあったけど、上位を狙うにはちょっと力不足。

渡辺　大妻、学芸は、さらに青学とも離れているし。

川上　女子のほうは慶大が実に38シーズン（19年）ぶりに一部に復帰したということが、特筆に値すると思う。

朝倉　中村主将の努力がついに報われたということじゃないですか。

38シーズンぶりの慶大昇格

本誌　女子をまとめてみると。

川上　日女体の不振に対して、東女体のがんばり。

野口　日体大は取りこぼすことなくまとまったということかな。

渡辺　上位三校、そして中間一校、さらに下位二校の力の差は当分接近しそうもないな。

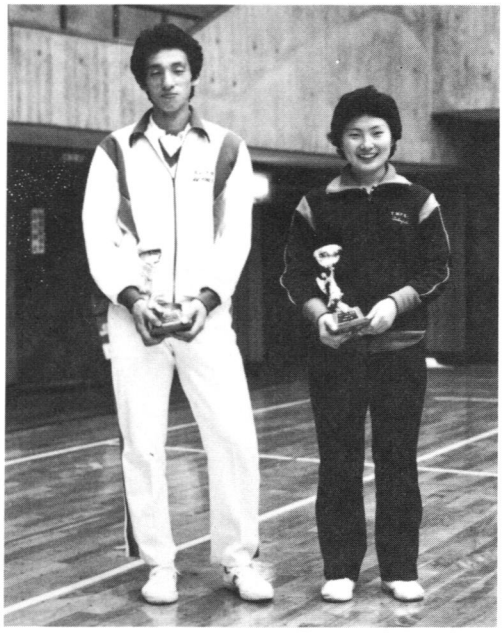
本誌　男女ともに、次々ナショナルチームに選手を送り込めるような盛り上りを期待して、このへんで。

▼朝倉康善（早大）



▼本誌編集部では、今年度から低迷を指摘されて久しい、学生バドミントン界の奮起といっそうの活躍を願って「ガッツ&フェアープレー賞」を創設いたしました。

そして、関東学生春季リーグでめざましい活躍をした二人の選手＝宮森選手（法大）高岸選手（東女体大）＝に贈りました。



◇男子一部リーグ順位

一位＝法政大学4勝1敗25ポイント、二位＝中央大学4勝1敗23ポイント、三位＝早稲田大学3勝2敗、四位＝日本大学2勝3敗、五位＝日本体育大学1勝4敗14ポイント、六位＝青山学院大学1勝4敗9ポイント

◇女子一部リーグ順位

一位＝日本体育大学5勝0敗、二位＝東京女子体育大学4勝1敗、三位＝日本女子体育大学3勝2敗、四位＝青山学院大学2勝3敗、五位＝大妻女子大学1勝4敗、六位＝東京学芸大学5敗

◇主な記録〈男子〉

第1日

早大 5 (S 2—2, D 3—0) 2 中大

橋川 0 (9—15, 4—15) 2 西山

石黒 2 (17—16, 2—15, 18—15) 1 上原

水内 2 (15—12, 18—15) 0 西山 吉岡

平野 2 (15—11, 15—12) 0 細谷(志) 多田

橋川 2 (15—15, 12—15, 15—12) 1 宮本 上原

酒井 2 (15—15, 15—4, 15—12) 0 多田 細谷(志)

高橋 2 (15—10, 12—15, 15—15) 1 宮本 上原

水内 2 (15—15, 15—1, 7—0) 0 多田

岩渕 0 (10—15, 5—15) 2 細谷(志)

第3日

中大 4 (S 3—1, D 1—2) 3 法大

西山 2 (15—0, 15—11, 8—15) 1 富田

吉岡 0 (12—15, 10—15) 2 宮森

上原 1 (11—15, 8—15, 15—11) 2 酒井 冨田

多田 細谷(志) 0 (8—15, 6—15) 2 峯 宮森

吉岡 西山 2 (15—4, 15—9) 0 楠美 丹藤

上原 2 (15—8, 18—14) 0 酒井

細谷(志) 2 (15—9, 15—8) 0 毛利

青学大 4 (S 3—1, D 1—2) 3 早大

◇主な記録〈女子〉

第3日

東女体 5 (S 3—0, D 2—0) 0 日女体

高岸 2 (11—8, 4—11, 11—3) 1 石田

柴田 2 (11—4, 11—2, 6—11) 1 内田

高岸 川島 2 (15—2, 15—9) 0 渡辺 石田

柴田 土田 2 (15—3, 12—15, 15—9) 1 伸豊田 豊田

小倉 2 (15—11, 15—11, 4—15) 1 水内

尾山 2 (18—15, 6—15, 18—17) 1 橘川

林田 長田 0 (5—15, 4—15) 2 高橋 酒井

小浜 小倉 2 (15—10, 9—15, 15—9) 1 平野 水内

虎尾 尾山 枝 0 (9—15, 8—15) 2 橘川 石黒

小浜 1 (1—15, 10—15, 15—15, 9—15) 2 平野

林田 2 (15—11, 15—7) 0 石黒

第5日

日女体 3 (S 2—1, D 1—1) 2 日女体

山沢 0 (8—11, 3—11) 2 石田

枝 2 (11—2, 11—2) 0 渡辺

高藤 野井 2 (15—15, 15—17, 15—4) 1 小野 峯

中沢 松枝 0 (8—15, 2—15) 2 渡辺 石田

鹿野 2 (11—6, 11—12, 11—5) 1 内田

藤井 0 (5—11, 8—11) 2 柴田

枝 0 (4—11, 8—11) 2 高岸

第4日

日女体 3 (S 1—2, D 2—0) 2 東女体

川島 2 (11—9, 9—11, 11—3) 1 渡辺

鹿野 2 (11—6, 11—7) 0 川島

高藤 野井 2 (18—14, 12—15, 15—4) 1 土田 柴田

中沢 松枝 2 (15—13, 15—8) 0 川島 高岸

大経大またも大魚逃がす

四条畷は一瞬ヒヤリ

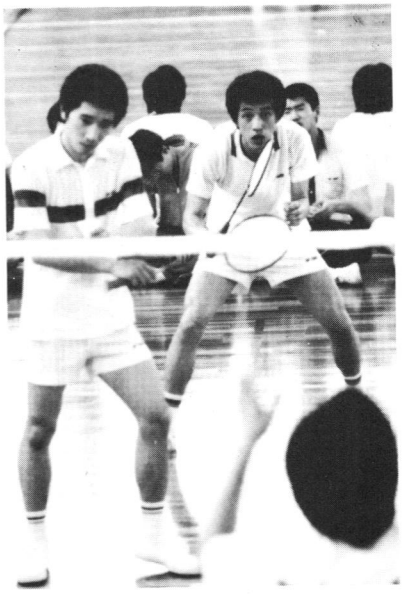
昭和54年度関西学生春季リーグ戦

最終日結果

▼男子一部

| | | |

戦であったかもしれない。



西堀・吉兼組（近畿大）

―男子―

視線は当然第1コート、近畿大学と大阪経済大学戦に集まる。10年間20シーズンにわたり、関西の王座を守ってきた近大。かたや万年2位の大経大。戦前の下馬評では、大経大優勢の声が高かった。現に4月下旬に行なわれた大阪選手権団体戦では、2複3単であったとはいえ、ストレートの3―0で大経大が近大を下し、優勝を遂げているのだ。

しかし最終日が近づくにつれて、その声も薄らいでいった。大経大の第3ダブルスにどうしても不安が残る上に、エース田島が対同志社大学戦で諸多に敗れるなど、もうひとつピリッとした所に欠ける。かたや近大はダブルスに穴がなく、西川・西堀のシングルスも全く、あぶなげない。

しかし提出されたオーダーは明らかに大経大有利。第1、第2ダブルスは順当な結果。第3ダブルスは、ファイナルの末、近大に軍配。しかし大経大にすれば、ダブルスを2本取られることは、ある程度覚悟をしていたはずだ。シングルスで、岡田が西川をつぶすのは少々無理とはいえ、白井、田島、山本には、十分勝算がある。案の定、白井はダブルスからの連続出場にもめげず、木下をストレートで破った。

問題は第2シングルス。第1ゲームを軽く取った田島が、第2ゲームになると信じられないようなミスを連発。第2ゲームを17―16の接戦の末、取り戻した西堀は、終始受け身にまわっていたが、田島の詰めの甘さに助けられ、ファイナルゲームを手中にした。



河村・橋本組（四条畷学園短大）

第3シングルスは、奮闘のかいなく、岡田が西川に敗れ、優勝杯はまたしても近大へとわたった。主力メンバーが卒業しても、それをカバーする選手を確実に生み出していく層の厚さ、また優勝することが義務であることのような選手の自覚、それが伝統の力というものか。

今リーグで注目されるのは、西堀のシングルス。最終日で田島を破ったのを初め、同大の諸多、京産の中村をストレートで破り、今年、来年と関西のNo.1へ成長してゆくのは確実。さらに西日本、インカレでの活躍を期待したい。

―女子―

四条畷、武庫川が他の4校を全く問題とせず、すべて5―0で破り、最終日をむかえた。四条畷は、合川、石田、橋本の新1年生が加わったものの、昨年からの戦力低下は否めない。しかし、河村、平は健在。従ってダブルス1本、シングルス2本はどうころんでも取れるはず。しかし今リーグでは、これからのことを考えてか、平は、4日目と最終日に、合川と組んで出場したのみ。

一方武庫川は、網家、井口、福岡の成長がめざましく、新1生年の寺田も、四条畷を除く他校の選手には十分通用する。また網家は、最終日の対四条畷戦でも、ダブルスで河村・橋本組を、さらにシングルスで石田を破り、2ポイントを稼いだ。おそらく四条畷が、関西リーグで2ポイントも取られたのは、初めてのことであろう。武庫川が3回生、2回生中心であることを考えれば、今後が楽しみ。関西にあるのが四条畷だけでないことを、全国に知らしめるためにも、さらなる飛躍を期待したい。

大体大は、3位になったものの、山中、森のシングルス、ダブルスに成長の跡がうかがえない。また大教大の築田は、柔軟でセンスの良いプレーをみせるが、フットワークがまだワンテンポ遅れている。

今年の秋季リーグでは、入替戦で一部昇格を遂げた、阿部、吉川を擁する天理大が加わるため、どういった展開になるか、楽しみである。

（関西学生バドミントン連盟記）



RACKET BADMINTON STRINGS

世界のトーアが贈る バドミントンガットシリーズ



レオイナ　ホーン
LEOINA HORN S



グラファイト　レオイナ
GRAPHITE LEOINA 66



レオイナ　シープ
LEOINA SHEEP 66



トーア　ストリングス
TOA-STRINGS SSW



トーア　ストリングス
TOA-STRINGS SSW

東亜合繊株式会社

〒658 神戸市東灘区本山中町4丁目7番5号
電話 神戸 078 (441) 2001(代)～5番

バドミントン日本伝来の地 記念碑

除幕式おこなわれる

長崎市　出島オランダ商館跡において

長崎県バドミントン協会創立30周年記念

記念碑の建立について

長崎県バドミントン協会では、協会創立30周年記念事業の一環として、先に「ワールドカップ'79長崎大会」の開催や、記念式典、功労者表彰を行なってきたが今回さらに「バドミントン伝来の地」記念碑の除幕を行なった。

五月二七日、長崎市出島オランダ商館跡には、市長をはじめとして体育関係者、県下支部協会員多数が参列し、式は盛大に挙行された。

この記念碑建立の地は、かつて徳川鎖国時代、我が国唯一の開港場で、貿易、文化の交流の門戸として栄えた、長崎出島のオランダ屋敷跡地で、古文書にある屋敷と同一場所である。現在この地は、国指定史跡として保存されており、観光コースになっており、当日の除幕を物珍らしそうに見守っている観光客もみかけられた。

この記念碑建立については、去る一九七三年九月第一回日中バドミントン競技大会の時、同地に両国選手による記念植樹をし、日本のバドミントン発祥の地の、仮の木柱による記念碑を建てていたが、今回それを花崗石（みかげいし）の碑に建て替えた。日中大会当時、中国選手団長、孫藍先生揮毫の「『日本発祥の地記念碑』孫藍」も側面に彫り込んで、約束も果たすことができた次第である。

願わくば、観光名所蘭館跡地から、バドミントンがさらに世に宣伝され、発展に一役を担うことを期待するものである（柿木修宣）。

▼碑文

徳川鎖国時代、唯一の門戸であった当長崎出島には、紅毛人（オランダ人）が多数来航した。その時代の風習や奇談などが「紅毛雑話」という古文書に絵画入りで収録されている。その中に、バドミントンの用具によく似た「ラケット」（羽子板）「ウーラング」（羽根）の図が紹介されており、さらに、この用具を使って屋外で遊んでいる図が、「長崎阿蘭陀屋敷絵図」に画かれている。これは、英国バドミントン村での本格的な競技発生期（一八七三年）をさかのぼること約百年の一七八〇年代と推測される。

長崎県バドミントン協会は、創立30周年を記念し、わが国におけるバドミントン伝来の地であるこのゆかりの地に記念碑を建立するものである。

▼記念植樹

オオカナメモチ　バラ科

中国産の常緑高木で暖地を好む。幹は多く立ち、枝は粗によく伸びる。樹形はだ円形で、樹高は普通3～4mだが、大木になると10mあまりになる。新芽は紅褐色で後に濃緑色となる。大葉で長さ15～17cmあまりのだ円形で革質、5～6月に白花を散房花序に多くつける。10月に球状の実が多くなる。

植樹時（一九七三年九月一五日第一回日中バドミントン大会）は高さ1.5m程度であったが、現在では4.5m程度に成長している。

バドミントンと長崎

昔、インドのボンベイ州プーナで発生した



祝辞を述べる本島市長

このゲームは、一八四四年駐在の英国士官によって英国に伝わり、プーナと呼ばれていたが、一八七三年にグロスターシャのビューフォード侯の所領バドミントンで本格的な競技となったもので、バドミントンの名称はその地名をとって名付けられたものであります。

一方、長崎では今から約二〇〇年前に出島オランダ屋敷内の事柄を記録した古文書や絵画のなかに、現在のバドミントンらしい用具を使用して遊んでいるところが紹介されており、これがバドミントンの先祖であるならば、英国に渡ったものより一足先（約一〇〇年前）に我が国に渡来したことになります。



横尾県協会会長あいさつ



記念植樹

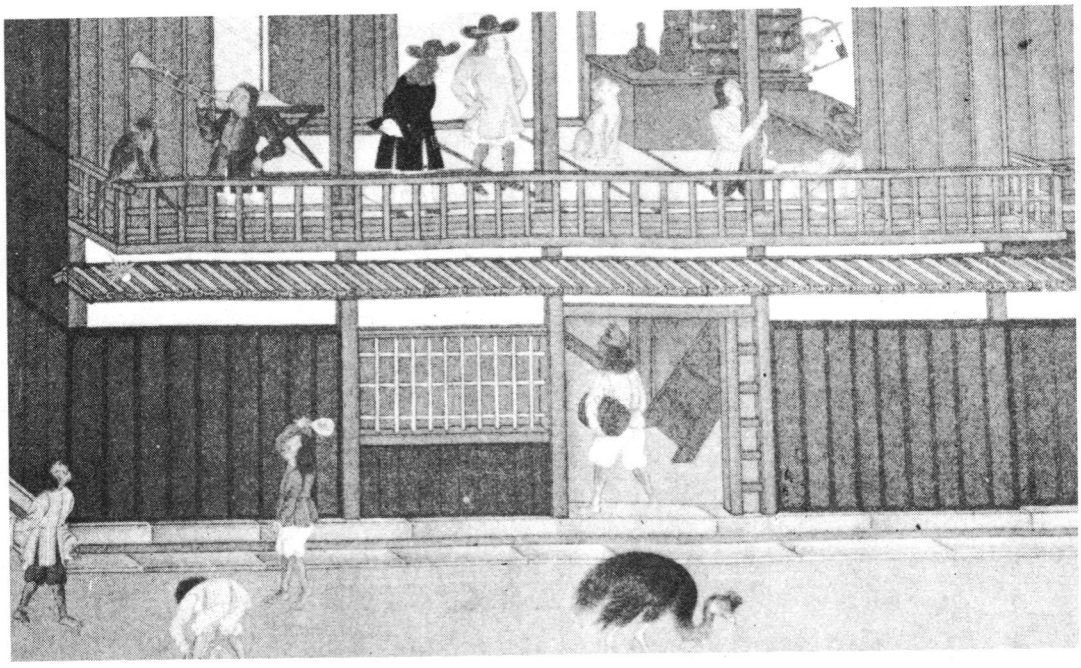


記念碑

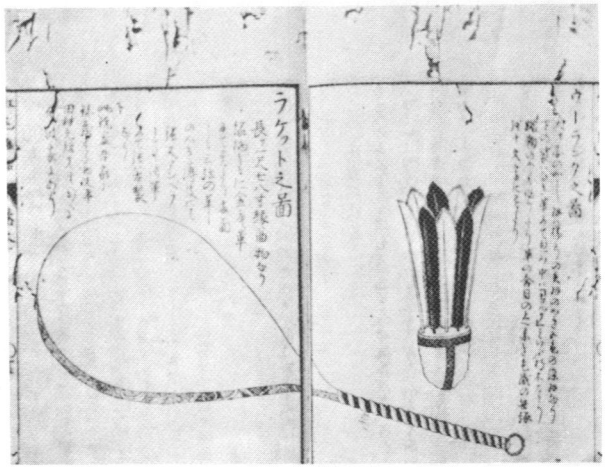
◇紅毛雑話

「紅毛雑話」（長崎市立博物館所蔵）は、森島中良（江戸の人一七五四年～一八〇八年）が編集し、その兄桂川国端が天明七年（一七八七年）に刊行したもので、徳川鎖国時代唯一の門戸であった長崎出島に来航した紅毛人（オランダ人）の風習や奇談更に蘭書にのせられた珍説などを収録したもので、外国事情を絵入りで紹介した珍書として当時太田南畝著「瓊浦（けいほ）雑綴」などと共に非常にもてはやされた書物である。

これは全五巻からなり、その第一巻に下記の事が記されている。



漢洋長崎居留図巻



紅毛雑話

◇長崎阿蘭陀屋敷絵図

「長崎阿蘭陀屋敷絵図」（長崎県立長崎美術博物館所蔵）

この絵巻物は「漢洋長崎居留図巻」二巻のうちの一巻で作者は荒木如元の作で約二〇〇年前に書いたものとされている。この絵で見られるように一階の屋根瓦の部分に羽根が見えるが白い半球に羽根が植えてある。黒坊と黒坊が愉しく羽根を飛ばして遊んでいる風景が画かれている。（提供者　片平直照）

○羽根板竝羽根

黒坊（注①）の弄（もてあそ）びなり。西洋館（でじま）にて閑暇（ひま）なる時は遣羽子（やりはご）越をつきて遊ぶなり。羽子板を「ラケット」といふ。羽根を「ウーラング」といふ。

ウーラング之図

大き図の如し羽根は揚弓の失羽の如き五色の染羽なり、下の袋は白き革にて包み中は「キヨルク」という朽木なり蹴鞠の如く作りたり革の合目の上へ赤き毛織の笹縁越（ささへりを）十文字に置たり。

ラケット之図

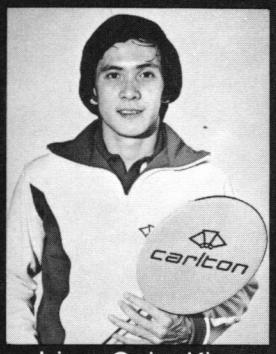
長さ一尺七・八寸（51㎝～54㎝）縁は曲物なり縁杯ともに金唐革（きんとうかわ）にて巻たり両面とも三弦の革の如き薄皮にて張り又アンペラ（注②）にても張革にて張は古製なり。

此玩具器吾家に珍蔵せる物先年田村元雄先生へおくる今波家にあり。

注①黒坊とは、この本や当時の書物などには「海上日本より三四〇〇里南天竺より、まだ、南にある瓜哇（ジャガタラ、今のジャカルタ）という四季大熱国の島に住む人種にて、色黒く常に裸体にて、ただ陰部を包み隠すのみ。常に飯と肴を喰うも豚を決して食せず」とある様にオランダ人が黒船で長崎にいつも伴なって来ていたインド人ではないかと思われる。

注②アンペラは多年草で芝をむしろに編んだもので帆や日よけに用い、また砂糖、茶、塩、生糸などの包装用にする。

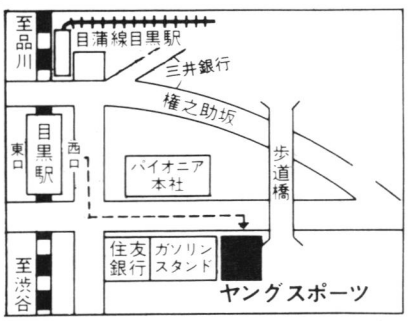
以上、資料、写真他は、長崎市柿木修宣氏の提供によるものです。



Liem Swie King
1978年度全英選手権
男子シングル優勝

大量入荷!!

'79バドミントンラケットは カールトンだ!!



ヤングスポーツ

〒153 東京都目黒区目黒1-3-16 目黒駅西口1分 ☎491-7822

分析シリーズ

バドミントンの時間分析

ワールドカップ'79女子ダブルス決勝
——その2

日本体育大学監督　関根義雄
国分寺市バドミントン協会　平川卓弘

これは、前号の分析シリーズで紹介した第一回ワールドカップ女子決勝戦の結果をさらに細かく調べてみたものです。その結果、各選手の特色がかなりはっきりと浮き出てきましたので紹介します。

私達が分析を通して知りたいと思っている研究目標の一つは「大会における実際の試合」から資料を集めて出場選手の特徴やクセなどをつかみ取ろうということです。

また、分析の結果から、どの試合にも通用する典型的なパターンが解明できるならば、これを試合に臨む選手の戦法や戦略に活用させたい。そんな情報を取り出そうと努力しています。

分析を進めてゆくと、特定な一つの攻め、アタックに対して「最も良いリターンは一つしかない」のだと思えてなりません。

このように、いろいろな技術に関する因果関係が究明されると、紙上で作戦を立てるとも可能になります。そこから、試合に望むとき対戦相手を攻略するために、どうしても必要な技術を明らかにしたり、また、特定な選手に対処できるような技術の習得目標を明確に示すことができるのではないかと考えています。

サービス

表—1は各選手がおこなったサービスの本数とサービスの種類を示したものです。

表—1によると四選手全員がショートサービスを主体にしてゲームを進めていたことがわかります。

ショートサービスは四選手合わせて、66本打たれています。これは全サービス数78本の85%に当ります。

日本組はショートサービスが全サービス48本中43本で、90%に及んでいますが、インドネシア組は、サービス30本中ショートサービス数23本でその割合が77%と低くなっています。

ショートサービスのリターン

表—2はショートサービスに対するリターンについて、選手別に組み合せて示したものです。

インドネシア組の戦法は、米倉選手に対してはネットで戦わないようプッシュで返し、植野選手に対してはヘアピンで戦う戦法だったようです。

ベラワティ選手の米倉選手に対するヘアピンが多いのはクセなのでしょうか、よく理解できません。

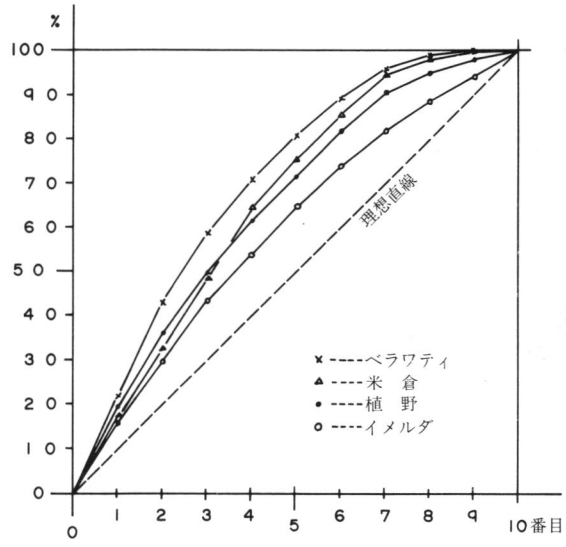
一方、日本組は二人とも、自分の得意な技で攻めていた様子がうかがえます。

米倉選手はスピンの良くきいた鋭いヘアピンで、また、植野選手はプッシュを中心としたハーフショットで相手の左右を攻めています。相手チームの選手をよく研究していたことがうかがえます。

ラリー中のフライトの種類

表—3は、サービスを除いたすべてのフライトについて記録したものです。

試合時間は第1ゲーム13分、第2ゲーム14分の27分間でした。この間サービスを除いて



図－1．各ストローク上位10番目までの比較
（選手ごとに、多い順に並べ変えた）

表－3．サービスを除いた全ストローク数（本）

	日本組			インドネシア組			合計
	米倉	植野	計	ベラワティ	イメルダ	計	
プッシュ	12	16	28	9	19	28	56
ヘアピン	14	4	18	17	20	37	55
クロスネット	4	2	6	0	2	2	8
ドライブ	9	13	22	13	12	25	47
アンダー ドライブ	1	9	10	15	5	20	30
ドリブン クリヤー	6	4	10	1	3	4	14
アンダー ドリブン クリヤー	12	21	33	8	5	13	46
ハイ クリヤー	6	1	7	12	1	13	20
アンダー クリヤー	12	17	29	18	6	24	53
スマッシュ	20	31	51	32	18	50	101
ドロップ	13	13	26	13	15	28	54
ストップ	3	2	5	5	12	17	22
カット	1	1	2	1	3	4	6
アンダー カット	2	4	6	1	8	9	15
ハーフ ショット	1	14	15	0	3	3	18
クロス コート	0	1	1	0	2	2	3
選手別合計数	116	153	269	145	134	279	548

548本のショットが交されたことを示します。多い順にならべると、

1	スマッシュ	101本	18%
2	ドリブンクリアー	76本	14%
3	ハイクリアー	73本	13%
4	ヘアピン	63本	11%
5	ドライブ	61本	11%
6	プッシュ	56本	10%
7	ドロップ	54本	10%
8	ストップ	21本	4%
9	その他		

表－3の本数の比較では見にくいので、見やすくするために選手別にパーセントで示してみたのが表－4です。

選手の比較をすると興味あることがわかります。細かく見てみましょう。

米倉選手はスマッシュ、ドリブンクリアー、ハイクリアー、ヘアピンが主です。しかし、植野選手はスマッシュ、ドリブンクリアー、の次にドライブです。彼女の特色がよく出ています。4番目にハイクリアーとなります。

ベラワティ選手は、スマッシュの次がハイクリアー、そしてドリブンクリアー、4番目にヘアピンと米倉選手と似ています。

イメルダ選手は、他の3選手と全く違う選手です。彼女の技で最も多いのが、ヘアピンです。次がプッシュです。スマッシュは3番目です。4番目に多いのが、ドライブとドロップです。そしてクリアーが少ないのが目に

表－1．サービスの本数と種類（本）

	日本組			インドネシア組			全選手計
	米倉	植野	計	ベラワティ	イメルダ	計	
サービス数	26	22	48	17	13	30	78
内訳 Short Service	23	20	43	15	8	23	66
内訳 Long Service	1	1	2	2	5	7	9
内訳 Drive Service	2	1	3	0	0	0	3

表－2．ショートサービスのリターン（本）

	インドネシア組				日本組			
	米倉にして		植野に対して		ベラワティに対して		イメルダに対して	
	ベラワティ	イメルダ	ベラワティ	イメルダ	米倉	植野	米倉	植野
ヘアピン	7	2	5	5	4	1	3	1
プッシュ	5	5	1	3	1	4	2	2
ストップ	1	0	0	4	0	0	0	0
ハーフショット	0	0	0	0	0	3	0	0
クリヤー	1	1	2	0	1	0	0	0

つきます。イメルダ選手はラリーの最中に逃げない人です。シンの強い人なのでしょうか、立派なプレーヤーです。

表－4の各ストロークを多い順に並べ変えて比較したのが図－1です。例えば、表－4でベラワティ選手が最も多く用いたストロークはスマッシュの22％です。二番目に多いのがハイクリアーで21％、以下ドリブンクリアー16％、ヘアピン12％、ドライブ10％などとなっています。このように各選手別に多い順に並べて図に示しものです。

図－1の中で、最も大きく弓形に曲っているのが、ベラワティのグラフです。図ではイメルダ選手のグラフが最も直約に近いところにあります。イメルダ選手のように、直約に近いグラフになる選手ほど多くの変代に富んだ技術を駆保している人で、ワザ師だということです。

4人の選手を技術の多彩さで比較すると、一番イメルダ、二番植野、三番米倉、四番ベラワティ選手の順になります。

表－4．各ストロークの選手別割合（％）

	米倉	植野	ベラワティ	イメルダ
全ストローク	100％	100％	100％	100％
スマッシュ	17％	20％	22％	13％
ドリブン クリヤー	1	6	6	7
ハイ クリヤー	1	2	1	5
ヘヤピン	1	4	2	6
ドライブ	1	4	1	1
プッシュ	1	0	2	4
ドロップ	1	1	0	1
ストップ	1	1	6	4
etc	3	4	3	1

選手別に特徴をみると、

表－4をもう一度見て下さい。イメルダ選手を調べると、彼女はヘアピンショット、プッシュを主体に組立てていることがよくわかります。

ダブルスゲームでは、自分の打ったシャトルを相手選手にネットより低い位置で受けさせることが大切ですが、この表でわかるとおり、イメルダ選手はプッシュ、スマッシュ、ドロップ、ストップ、カット、ハーフショットとネットより低い位置で受けさせる球を、彼女の全ストローク数の何と80％近くも打っているのです。

これを逆の立場でみると、イメルダ選手の打球をネットより高い所から、オーバーヘッドストロークで打つことが可能な球（イメルダ選手の打ち出すドライブ、ドリブンクリアー、ハイクリアーなどのこと）は全ストローク中で20％程度しかないことを意味します。

これは、イメルダ選手以外の他の3選手がオーバーヘッドで打つことが可能なフライトを40％以上（米倉41％、植野42％、ベラワティ47％）も上げているのに比較するとたいへんな差です。

データーは、イメルダ選手がきわめて優れたダブルスプレーヤーであるということを、よく証明しています。

有望プレーヤーの発掘・育成に発想の転換を

熊本県バドミントン協会理事・熊本バドミントンクラブ指導者　葦原健身

①中学生にオールジャパン大会への道を

ここ数年、熊本県青少年層の活躍は、小学生から一貫して指導するシステムをとって以来、その成果には目覚しいものがあります。去る3月、本県バドミントン界の特筆すべきニュースとして、熊本県総合選手権大会女子シングルスにおいて「中学生の県チャンピオン」が誕生しました。（森山弘美・熊本バドミントンクラブ所属・当時中学2年）

小学生層に手懸け10年、他県に先駆けたおかげで、本県ジュニア層の活躍は全国スポーツ関係者の注目を浴びるようになっているなか、彼女の優勝は持前のパワー、実力からして当然予想されたこととはいえ、この結果はバドミントン界の将来に、一筋の光明をもたらすものと思います。

彼女は中学生とはいえ、抜群の実力と素質の持主であり、昭和53年度の全国中学生大会において、圧倒的な力で優勝、全九州総合選手権大会においては、団体一般女子2位のペアを破り、そしてまた、県総合ではインターハイ2位、団体少年女子ベスト4の高校勢、あるいは一般選手を総ナメにしており、彼女の実力は関係者の認めるところとなっております。

手前みそになりますが、日本女子バドミントンの将来を背負って立つのは「彼女」であると断言してゆずらない指導者としての私ですが、若い選手の将来性と可能性を考え、世界スポーツ界の若年化などの諸情勢に鑑み、「オールジャパン出場」への夢と希望を与えてほしいと思います。

②ジュニア層の海外派遣を

海外遠征メンバーを見て、いつも思うことですが、どうも特定の者に固定しているようで、特に若いジュニア層選手の派遣などは皆無であり、日本協会は真剣に長期的視野に立ち、「若い力」への投資を考えておられるのか疑問を感じます。

日本バドミントンは、諸外国のそれに比べて、選手層、選手養成の貧弱さには目をおおいたくなるものがありますが、この際飛躍的発展のためにも、各地に埋もれている優秀な若い層の派遣、交流を推進してほしいと思います。（既に、高校生のみならず、小中学生をも対象としてもおかしくない時期に来ています）

③児童・生徒の大会は選抜方式で

児童・生徒へスポーツを普及参加させる上での鉄則は、「学校単位」にあらずであり、我々は一人でも愛好者がいれば、出場、活動の機会を与えなければなりません。現在、現場ではトップ級選手が民間クラブ、社会体育クラブ等に所属、練習しながら大会時だけ学校体育となる変な現象が起ったり、また学校に部がなく、体育連盟に加盟していないので出場できないとか、単独校では団体編成が無理であるとか、「学校対抗」に固守するため、有望選手の出場の夢が断たれるなど、数々の問題が出てきております。

また「学校対抗」は学校名の高揚、児童・生徒の士気等に利用され、少数者の選手強化を計り、そのために選手補強や予算の確保に窮々とし、勝利主義を教育の場に持込んでおり、結果的には一部の者が学校施設、設備を独占し、他の大部分の者をスポーツから疎外させることになり、「学校体育」の趣旨にも反する面が多々あるように思います。

このような理由から、「学校対抗」は望ましくないのみならず、いまや児童・生徒のためであるべき大会が、学校の体面や教師の権利主張に引きずられ、「学校教育という美名」のもと児童・生徒不在のスポーツになってきているような気がします。「学校対抗」が教育上の色々な弊害をもたらし、学校部活動が競技力の向上や強化のためには限界である今日、児童・生徒の大会活動は、「学校単位にあらず」を痛感する次第です。

バドミントンを愛する者の一人として、大会は協会主催とし、全ての愛好者にチャンピオンへの道を開く「選抜方式」を強く要望します。（特に学校体育連盟には大会主催から手を引き、教育の原点に帰ってもらいたい）

④協会主体の選手養成を

日本には明治以来、独特の学校体育制度が存在していますが、ヨーロッパ諸国の広い底辺からなるクラブ制度、社会主義諸国におけるステートアマ制度に対抗できるシステムの確立が急務のようです。

端的に言って、学校体育制度が日本スポーツ界発展に貢献してきたのですが、反面学校体育

教材としてのそれが、スポーツ水準の上昇、選手強化養成のためのガンとなってきていることもこれまた事実です。そこで現状打破のために学校教育外活動としての地域住民の手による自主的なスポーツ活動が必要となり、学外指導者が中心となり（教師も一社会人の立場へ帰る）幼年時代からの一貫した指導を可能ならしめるところの「競技単位」社会体育クラブを提言するものです。（熊本県で実施）

学校体育制度による長い伝統と地域の施設やクラブが不足しているため、学校の部活動を性急に「社会体育」に移すには、熊本県の例でも解るように無理がありますが、これは時間が解決してくれることであり、地域や住民に密着したスポーツクラブこそがバドミントンを支えるものであると信じて疑いません。とはいえ、何よりも他力本願でなく、日本バドミントン協会が自らの力で、スポーツクラブの育成、もしくは資金面等の援助をし、有望なジュニアを養成する方策と努力、そしてそれを可能ならしめる発想の多様性こそが最も必要ではないでしょうか。

THE BADMINTON WORLD STICKER '79

おなじみになりましたバドミントン・ワールド・ステッカーの79年版ができあがりました。

いよいよ3年目を迎えたステッカーですが、全国のバドミントン・ファンにすっかり定着した感じです。

各地でキャリング・バッグやラケットケースに貼られたステッカーをみるたびに、編集部一同ますます張り切っています。

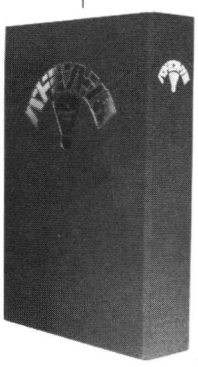
今年の色は明るいグリーンです。銀パクの地、白いシャトルは例年どおりです。

価格は1枚100円は前回と同じですが、5枚まとまると300円に割り引きいたしますので、クラブの皆さんでまとめてお申し込みください。

送料は何枚でも50円だけ加えてください。お申込み方法は他の出版物同様、巻末とじこみの振替用紙をご利用ください。振込み手数料はかかりません。

バドミントン界編集部

専用合本バインダーどうぞ



バドミントン界も間もなく創刊10年を迎えます。その10年間には石油ショックによる紙不足や、インフレによるコストのアップなどいろいろありました。しかし読者の皆様の力強いバックアップによって、今年から増ページを実現することができました。

本誌は毎月きちんと揃えて保存すれば、バドミントンの百科辞典となるものです。

そのために本誌一年分12冊を、穴をあけたり、ノリを使ったりすることなく、簡単に保存しておくことのできる専用合本バインダーを用意してあります。

デザインは写真のとおりですが、表紙は濃紺の特殊レザーに、タイトルを銀パクで押したものです。クリップも丸味をつけて扱いやすくした丈夫で長い間の保存に耐えられるものです。

専用合本バインダーは一冊定価500円ですのでご希望の方は左記の送料を加えて、本誌巻末とじこみの振替用紙に必要事項を明記のうえ、お近くの郵便局からお申し込みください。

（送料・一冊＝300円、三冊まで600円、四冊以上すべて700円）

バドミントン界編集部

読者と編集者

特集号について

コンニチワ！

私は、バドミントン界が発行される日を、楽しみにしているバドミントンファンです。

お便りしたわけは、バドミントン界5月号に〝有名な選手の特集号〟を作ると書いてあったのですが、特集号には、ワールドカップ'79や、69回全英選手権などに出場した選手だけではなく、小島一平さんや、インドネシアのMr.ルディ・ハルトノなども載せてもらいたいのですが…どうでしょうか？

（埼玉県越谷市、札幌のわがままおとめさんより、もっともっとわがままな、中二のおとめより。）

▼ご意見は十分に練って取り入れたいと思います。

賞をありがとう

本誌33ページからの「関東学生春季リーグ」の記事中でもお知らせしたとおり、本誌創設の〝ガッツ&フェアープレー賞〟は、宮森選手（法大）高岸選手（東女体大）に贈りました。それに対して、高岸選手から談話がとどいていますので、ここにご紹介するとともに、今後さらに活躍を期待したいと思います。

▼高岸選手（東女体大）の話

今回のリーグ戦では、第3位から一歩前進の2位という成績と同時に、バドミントン界より「ガッツ&フェアープレー賞」という思いがけない賞をいただき、大変嬉しく思います。

東女体大としても、私としても、今までのリーグ戦では、フアイナルゲームにもつれると、負けてしまうといった弱さがあったと思います。しかし今回は、それを乗り越えられた、という気がします。このことが勝因となり、重みある一歩になったのだと思われます。

今後もいただいた栄誉に恥じないように、一試合、一試合を大切に頑張っていきたいと思います。

特派記者募集

地方の大会やクラブ活動、強化練習などについて、本誌あてに定期的に資料を送っていただける方を募集します。一応本誌特派記者となっていただき、原稿料をお送りいたします。

原稿の形にまとめる作業は、当方でいたしますので、資料、大会結果などをお送りくださるだけでけっこうです。

本誌編集部あてハガキでご連絡ください。お待ちしています。

◆先月号は、トマス・カップ取材で編集部が手薄になり、内容的に不十分な構成になってしまいましたが、今月号はまたもとの48ページ建てに戻しました。

◆インドネシアの強さにあきれてばかりいないで、日本も次代の選手を育てないと、ますますトップとの距離が開いてしまうようです。

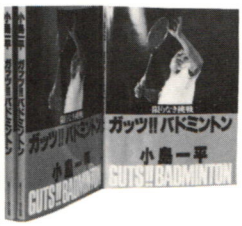
◆女子についても、インドネシア・ナショナル・チームの練習を見る機会に恵まれましたが、ユーバー杯防衛は安閑としてはいられない状況です。

◆今月号も、学生連盟をはじめ、多くの人々のご協力を得ました。今後とも、いっそうのご協力・ご指導をお願いいたします。

新入部員必読の書!!

小島一平著 ガッツ!!バドミントン

——限りなき挑戦



第11回トマス・カップ・インターゾーンが行なわれたジャカルタでのこと。現地のファンは口々に「イッペイ・コジマはどうして来ないのか」「彼は元気か」「イッペイ・コジマのプレーは今でもよく覚えているよ」等々、われわれに質問を浴びせてきた。

それほど小島一平の名前は世界的に知られている。

本書は、その小島一平のすべてをさらけ出したものである。体当たり半生記、実戦アドバイス、わがライバルたち、の三部から構成され、巻末には主要大会記録・ルールも収録されている。

新入部員の皆さんにとっては、今すぐ役立つものであり、インターハイ、全国中学等の大会を控えて、ぜひお読みいただきたい書である。

ご希望の方は、本誌巻末とじ込みの振替用紙の「その他」の欄に「ガッツ・バドミントン」と明記のうえ、定価2000円と送料240円を添えて、お近くの郵便局からお申し込みください。バドミントン界編集部

◆日本図書館協会選定図書

世界のカールトン

carlton

カールトンは水鳥?



● PHOTO・左より…
トーナメント・プラス, トーナメント, インターナショナル, クラブ



水鳥球

トーナメント・プラス

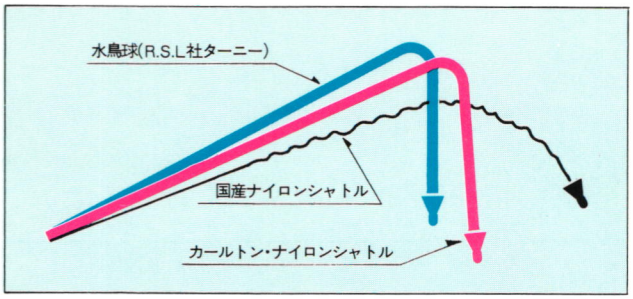
トーナメント・プラス
1ダース￥3,600(1個￥300)
日本バドミントン協会検定合格球
IBF(国際バドミントン連盟)公認球
常に世界をリードしてきたカールトンのニューモデルです。正確なフライト, すばやいターン・オーバー, そしてフェザーのフィーリング。トーナメント・プラスは確かにプラスαを感じさせるシャトルコックです。

トーナメント
1ダース￥3,300(1個￥280)
日本バドミントン協会検定合格球
IBF(国際バドミントン連盟)公認球
世界一の消費量を誇るナイロン・シャトルのベストセラー。水鳥球の数倍の耐久性をもち, しかも, 最も飛び方が似ていると評価されています。この絶大な定評は他の追従を許しません。

インターナショナル
1ダース￥2,800(1個￥240)
日本バドミントン協会検定合格球
IBF(国際バドミントン連盟)公認球
国産品とは比較にならないほど優れた性能をもち, しかも値段は国産品と変りません。耐久性はトーナメントよりも丈夫です。初・中級者のための試合・練習球としてどうぞ。

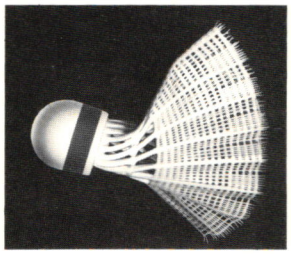
クラブ (練習球) 1ダース￥2,400(1個￥200)

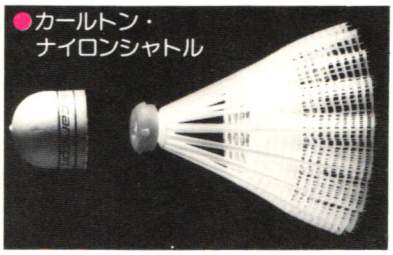
昭和54年度より, ナイロンシャトルは中学校大会使用球になりました。



1 Flight (ハイクリアー時に於る飛行曲線)

カールトンの目標は, 水鳥球の原点といわれる英国R.S.L社のターニー・モデルです。垂直に落下してこそシャトルコック。これこそ, カールトンが追求し続けている基本テーマです。右の図を見れば, なぜカールトンが世界中のプレーヤーに使用され, 他の追従を許さないか理解していただけるでしょう。



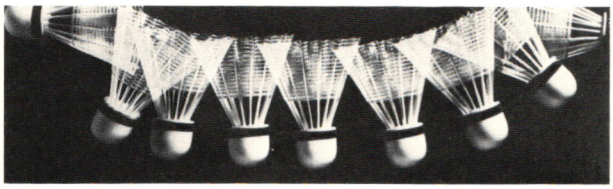


●カールトン・ナイロンシャトル

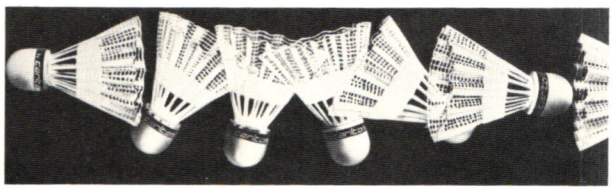
2 Durability (耐久性)

丈夫と言われるナイロンシャトルをさらに一歩進めたのがカールトンです。回転機構の採用によりネジレをなくし, ヘッドもこわれやすいコルクからP.V.Cに変える事によって耐久性を更にアップしました。
(寒冷時に使用される時は, お湯で暖めてからご使用下さい。耐久性がグーンとアップします。)

●国産ナイロンシャトル



●カールトン・ナイロンシャトル



3 Turnover
(ネットプレー時の復元性)

ターンオーバー。この返りの速さこそカールトンの真髄です。ごらんの通り, 国産シャトルと比べ違いがひと目でわかります。正確なショットを生む素早いターンオーバーこそ, 微妙なタッチが要求されるバドミントンには欠く事のできない大事な要素です。

総輸入元 メトロレジャー株式会社 東京都千代田区外神田5-6-4 TEL.(03)833-3661㈹

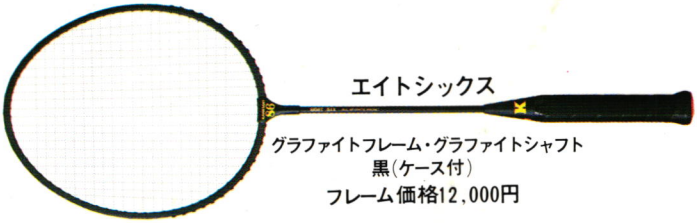


kawasaki

河崎ラケット工業株式会社

世界初のオールグラファイトラケット

バドミントンラケットも確実に進化しました。



エイトシックス

グラファイトフレーム・グラファイトシャフト
黒(ケース付)
フレーム価格12,000円



グラファイトシリーズ